

---

# SWEET TRAP

麻乃そら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SWEET TRAP

### 【Zコード】

Z2959P

### 【作者名】

麻乃そら

### 【あらすじ】

大企業の御曹司、朝吹紳一郎の花嫁に選ばれたのは普通の高校生  
の望（男子）。脅される形で結婚した望は、大きなお屋敷で若奥様  
として暮らすことになったのだが……

## 第一話（前書き）

サイトで公開したものに修正を加えました。  
内容は変わっておりません。

## 第一話

「それじゃあ、行つて来るよ、望  
「い、行つてらっしゃいませ。だ、旦那様？き、氣をつけて」  
僕は激しくどもりながら、早朝だというのにスッキリ男前のこの家の  
の主人、朝吹紳一郎に言つた。

メイドさんや秘書のひとが聞いているのに恥ずかしい…。

「旦那様か……。それもいいが  
もっと親しみを込めて呼んでほしいな  
え？」

「た、例えば？」

「紳一郎って呼んで、『じらん？』

「し、紳一郎さん？」

僕はまたしてもどもりながら、彼の名前を呼んだ。  
すると彼は僕の耳もとに唇を寄せて囁いた。

「……体は大丈夫か？」

昨日は疲れていたのに、無理をさせてしまったからな。  
何しろ、新婚初夜……

「わーっ！」

紳一郎さんは、早くいかないと会社に遅刻しますー」

彼はクスクスと笑いながら『なるべく早く帰るから』と言つて、高  
級外車の後部座席に乗り込んだ。

絶対さつきの声、秘書のひとに聞こえたぞ。

何であんなこと人前で言うんだよ、それもありもしないことを！  
断つておくが、昨日は本当ににも、何にもなかつたんだー！  
昨日僕はクタクタに疲れて、部屋に戻った途端にベッドに倒れこん  
で寝てしまった。

それが、

朝日が覚めると、おそれしことにあの男、昨日から僕の夫になつた『朝吹紳一郎』が、同じベッドの僕の隣で気持ちよそうに寝ていたんだ…。

「なんで、こんなことに……」

僕は昨日、『桃田望』から『朝吹望』になつた。

事の発端は、一ヶ月前にこの朝吹邸で行われたパーティだったんだ。

## 第一話

「なんだよ。このパーティ、ほとんど女人の人ばかりじゃないか！」

「やっぱり、これが紳一郎さんの花嫁選びのパーティという噂は本当だったのね」

僕より年がひとつ上の姉の環が言った。

「花嫁選び～？」

なんで僕のところに、招待状が来るんだよ？」

「さあねえ、望のこと女の子だと思ったんじゃない？」

間違いやすい名前だものね

先日、僕と環に『朝吹紳一郎』の名前でパーティの招待状が届いた。朝吹紳一郎というのは国内だけでなく海外でも事業を展開している有名な朝吹グループの跡取りだ。

確か20代後半で、政財界のご令嬢の花婿候補ナンバーワンらしいけど。

なんで、そんなひとが僕達に招待状を？

確かに僕達の父親も会社を経営していて、朝吹グループ関係の会社と取引はあるらしいけど、

全然比べ物にならないくらいちっぽけな会社だ。（お父さん、ゴメン）

僕達はもちろん、父親も本人に会ったことはない。

両親や僕が不審に思っているのに、姉の環は

「雑誌で見たことがあるけど、あそこのお屋敷素敵なのよねえ。お庭も拝見したいわ。なんでも大きな温室があるらしいわよ。お料理も豪華なんでしううねえ。あー楽しみ～」「……御曹司のことより、庭や料理の方が気になるらしい

姉は今日一日開放されているらしい庭と温室を見に行ってしまった。僕達を招待した男の姿は、最初に皆の前で挨拶をしたのを遠くから眺めただけだ。

彼の花嫁選びが本当なら、僕がここにいる意味はないよなあ。

『朝吹紳一郎』の招待を断るなんてどんなもんじゃないからって、父親に言われたから来たんだけど……。

帰っちゃおうかな、などと考えていると、

「いかがですか？」

ハンサムなボーイさんが僕に声をかけてきた。

手に桃まんじゅうがたくさん盛られた大きなお皿を持ってくる。

なんだかこの豪華な西洋風のパーティにはそぐわないような気がするのだが、

超高級桃まんじゅうなのだろうか？

それならぜひ、食べてみたい。

僕は自分の苗字に桃がつくからって訳ではないが、桃まんじゅうが大好きだ。

なにしろお気に入りの桃まんじゅうを置いてあるお店に、週一で通つているくらいなのだ！

「その一番上のが大きいですよ？」

僕は言われた通り、一番上の桃まんじゅうを取った。

別に大きいのが欲しかったわけじゃないんだけど、ピラミッドみたいに積んであつたら普通一番上から取るよね？

僕はその桃まんじゅうをパクンと頬張った。

「ん？」

何か固いものが入ってる。

「何だ？これ」

口の中から出したそれは、キラキラした大きい宝石が嵌めこんである指輪だった。

「?.何でこんなものが桃まんじゅうに?」

僕は、まだ近くにいる桃まんじゅうを勧めてくれたボーイさんを呼んだ。

「あのー、こんなものがさっきの桃まんじゅうの中に入ってたんですけど」

ボーイさんは僕が差し出した指輪を受け取ると一瞬嬉しそうな顔をしたのだが、

すぐに驚いた顔になり、「こ、この指輪はー!」と叫んだ。

……なんだかわざとらじこ?

「桃田様、しばくちぢりお待ちください。いいですねー。」

「は、はいっ!」

あれ?僕このひとつ前に前言つてないよね?

僕はボーイさんに言われるまま、手に食べかけの桃まんじゅうを持って律儀にその場にどどまっていたのだが、後でそれを激しく後悔する」とことなったんだ。

## 第三話

僕はしばらくして戻ってきたボーアさんに、パーティの会場から離れた豪華な応接室に案内された。

来る途中にいくつもドアがあり、もし「」ではぐれたら絶対遭難すると思って、

道順を覚えておこうと思ったのだが、途中で諦めてしまった。

一体、いくつ部屋があるんだよ！

環が言ってた通りす「」お屋敷だ。

掃除が大変そうだなあ……。

「申し訳ありません。すぐに紳一郎様が来られますので、もう少しお待ちください」

ボーアさんは丁寧にお辞儀をして部屋から出て行ってしまった。

あの『朝吹紳一郎』がここに？

僕に何の用があるんだ？

あの指輪のせい？……なんなんだろ？

なんだか緊張してきて、さつきのボーアさんが出してくれたお茶をゴクリと飲んだ。

凄く高そうなお茶碗だ。

割らないうちになくなっちゃ……。

応接室のドアが開いて、背の高い男性が入ってきた。

朝吹紳一郎だ！

さつきは遠目だったからよくわからなかつたけど、噂通り嫌味なほどの男前だ。

いかにもクールでやりての実業家つて感じ？

朝吹さんはしばらくの間僕を観察するよつ見て、それから口を開

いた。

「君がこの指輪をみつけてくれたのか？まいったな……」「？」

何にまいったのか知らないが、顔は「ココロ……せー、ヤーヤー」と  
ている。

「……みつけたっていうか、僕がたまたま食べた桃まんじゅうにこの  
の指輪が入つって……」

「君、男の子だよな？」「

「あ、あたりまえです！」「

この人、顔も頭もよさそうだけど眼が悪いのか？

「そうか……。これも運命かもしれないな」「

「え？」

彼は顎に手をやつて頷くと、僕に手招きした。

「ちよつとここに来て、僕の前に立つてくれないか？」「？」

僕は言われたとおりに彼の正面に立った。

「手を出して、ああ、左手だ」「

僕が左手を差し出すと、彼は持っていた例の指輪を僕の薬指にはめた。

「へえ、サイズもピッタリだな。似合つよ」「

「あ、あの？」「

朝吹さんは困惑している僕の左手を握ったまま言った。

「桃田望君、僕と結婚してくれないか？」「

「はあ！？」「

このひと、今なんて言つたんだ？

## 第四話

「……あの、今なんて言いました?」

「その年でもう耳が遠いのか?結婚してくれと言つたんだ。

僕の花嫁になつてほしい

「は、花嫁?僕、男ですよ?」

「わかつているが、じょうがない。

その指輪が、僕達の運命を決めたんだ

僕は薬指にはめたままの指輪をマジマジと見た。

「なんなんですか?これ」

「その指輪は朝吹家の家宝で、代々朝吹家の花嫁に贈られるしきたりになつてゐる。

母親が5年前に亡くなつて以来預かっていたんだが、なかなか結婚しないんで、

怒った祖母に取り上げられてしまつたんだけどね

「家宝!?

僕はビックリして指輪をはずそとしたのだが、きつくて抜けない

!!

何がピッタリだよ!

ギュウギュウに押し込んだくせに!

「僕は結婚なんてまだする気はなかつたんだが、最近祖母の具合が悪くてね。

自分が生きてる内に結婚してくれと、泣いて頼まれたんだ。あの祖母のことだから、仮病にウソ泣きじゃないかと思つているんだが…。

面倒くさくなつて、祖母が決めた相手と結婚することにしたんだ。

それで、祖母が適当な花嫁候補をリストアップして花嫁選びのパーティを開き、

会場のどこかに隠されたその指輪を見つけ、正直に届け出たひとを

僕の花嫁にすることに決めたんだ。

指輪が僕の花嫁を選んでくれるというわけさ。

祖母はロマンス小説の愛読者で、そういうロマンチックな趣向が大好きなんだよ」

「そんな無茶な。誰も反対しなかつたんですか？朝吹グループの後継者の花嫁をそんな方法で選ぶなんて……」

「祖母はこの家では一番発言力があって、朝吹家の者は誰もあのひとには逆らえないんだ。

……それにしても、まさかそれを桃まんじゅうの中に忍びこませているとは思わなかつたな。

確かに桃まんじゅうは祖母の大好物だが……。

とにかく、君が祖母に、いや指輪に選ばれた僕の花嫁ということになる。

曾孫の顔は見せてやれないが、そこまでは約束してないから男でも構わないだろ？」

「む、無効です！僕は間違つてこのパーティーに招待されたんです！」

あなたも嫌でしょ？男と結婚するなんて！」

「ああ、それは問題ない。僕はバイなんだ」

バイ？

男も女もいけるといつ、無駄に許容範囲の広いアレか？

「あなたには問題なくとも、僕は嫌です！

なんであなたなんかと結婚しなくちゃいけないんだよ！」

僕が叫ぶと、朝吹さんの眼が鋭く光った。

「花嫁選びを祖母にまかせた以上、俺はそれに従わなければならぬ。

こんな手は使いたくないんだが……」

突然彼の口調がガラリと変わった。

笑顔が怖い……。

「確かに君の父上の会社は、朝吹グループ系列の会社と取引があったんだよな？」

「これ以上は言わなくとも分かるだろ？」

取引を切るだけじゃないよ？と彼の目が語っている。

「そんな……」

僕は目の前が真っ暗になった。

「まあ、俺も鬼じゃない。

祖母の我儘で、君の一生を縛り付けるのはどうかと思うしね。

そうだな、1年俺と結婚生活をしてみて、お互いをよく知らうじゃないか。

それでどうしても我慢できなかつたら、離婚すればいい。

もちろんそうなつても、父上の会社には何もしないよ。

慰謝料も、1年間君の時間を拘束するんだから、充分なものを作払おう」

「…………」

この人との結婚生活なんて想像もできないけど。

1年……1年の我慢だ。

それで、お父さんの会社が無事なら……。

「わかりました……」

僕は俯いていた顔を上げて、正面に立っている男の端正に整った顔を見た。

「契約成立だな？」

朝吹さんは満足そうに頷いて、僕の左手を掴んで引き寄せた。  
そして、元凶の指輪に唇を寄せた。

「君はたぶん祖母に気に入られると思うよ？」

彼は僕がテーブルの上に置いていた食べかけの桃まんじゅうを見て、ニヤリと笑った。

## 第五話

僕は今『朝吹紳一郎の花嫁』として、この朝吹邸にいる。

あのパーティの日から一ヶ月の間、僕達は甘い婚約期間を過ごした。…ということはもちろんなくて、仕事で忙しい彼とは数回短い時間に結婚の打ち合わせの為に会つたくらいだ。

いつも秘書のひとと僕の両親が一緒に、ふたりつきりになることはなかつた。

僕達の結婚話を聞いて、両親も姉もあたりまえだが凄く驚いた。紳一郎さんは一日でも早く僕をお嫁にもらいたいと、両親を力強く説得した。

彼の説明によると、僕と紳一郎さんはパーティで運命的な出会いをして、愛し合うようになり、離れられない仲になつたそうだ……。

僕も『脅されます』とは言えないから、仕方なく話を合わせた。彼は話ながら時々僕に向かつて甘く微笑み、僕がそれに一々反応して顔を赤らめるので（なんでだ？）

両親はすっかりその話を信じてしまった。

姉の環は僕に何か言いたそうだったけど、結局何も聞かれなくてホツとした。

あの姉にしつこく追求されたら、僕は何もかも喋つてしまつただろう。

う。

そして一ヶ月後、つまり昨日、僕達の結婚披露パーティが朝吹邸の大広間で行われたんだ。

と言つてもケーキ入刀もキャンドルサービスもない普通のパーティだった。

もちろん僕の衣装はドレスではなく、普通のタキシードだ。…色は白だつたけど。

朝吹グループの御曹司の結婚なのだからもっと盛大にするのが本當だが、

僕が現役高校生であることに考慮して、世間にはまだ公表しないことになった。

…もつと別の問題があるんじゃないのか？

ちなみに今は6月なので、僕はジューンブライドの花嫁つてことになる。

彼のお父さんや親戚の人達は普通に祝福してくれた。  
相手が男の僕なのに、いいのかなあ。

朝吹のおばあさんの決めたことには逆らえないというのは本当みた  
いだ。

そのおばあさんは、パーティの席にはいなかつた。

体調を崩しているそうで、どこかの別荘で静養しているらしい。  
そのうち対面しなくちゃいけないんだろうけど、複雑だなあ…。

結婚したと言つても、僕はまだ17歳の高校生だ。

家庭に入つて、専業主婦（？）になる訳にはいかない。

僕は紳一郎さんを見送つた後、学校へ行く準備をする為に自分の部屋に戻つた。

迷わないよう、メイドさんに誘導されてだけど…。

この広いお屋敷には、今まで紳一郎さんと使用人の人達だけが住んでいたそうだ。

朝吹のおばあさんは世界中にある朝吹家の別荘を転々としているそ  
うで、ほとんどこの家には

帰らないらしいし、彼のお父さん、朝吹グループの社長さんは高級

「マンションに女のひとといっしょに住んでいるそ�だ。  
……まあ、いろいろあるんだろうな。

お屋敷から学校までの道順をまだ覚えていないので、車で送つても  
らい目立たない所で降ろしてもらつた。  
来週からバスか電車にしなくちゃ。

自分の教室に向かつていると、誰かに後ろからポンと肩を叩かれた。

「おはよう、桃田。いや昨日から『朝吹』だつたな？」

「先生！そんなことここで言わないでください！」

現代国語の小沢先生だ。

偶然にも小沢先生は紳一郎さんの親しい友人で、昨日のパーティにも出席していたんだ。

「ああ、学校では秘密なんだよなー。悪かつた。

それにしても、あいつが結婚するつて聞いてビックリしたんだけど、  
その相手がおまえだなんて一度ビックリだよ

「せ、先生！声が大きいよ！」

さつきの『悪かつた』はどこに行つたんですか？

「パーティで運命的な出会いをしたんだって？

朝吹のばあちゃん大喜びだろ？そういうの好きらしさからなあ。

今度、詳しく聞かせろよ？」

「……はあ、話せばいろいろと長くなるんですけど……言えません」

「ケチ。しかしあのプレイボーイが結婚ねえ……。

まあ、結婚前に遊びまくった男ほど、家庭に入つたら大人しくなる  
つていうから

おまえは心配するな、……つて俺が言うのもなんだけど

「紳一郎さんて、そんなに遊んでたんですか？」

「確かこの間までは、祇園の芸妓とナントカつていう女優とフラン  
ス人のモデルと…

俺が知つてるのはそれくらいかな。

「えーと、そろそろホームルームの時間だな。おまえも急げよ！」

先生はそう言つて慌てて僕から離れていった。

「モモ！風邪大丈夫か？」

僕が教室に入ると、友達の岳史が駆け寄ってきた。

「……うん。ちょっと熱出しちゃって、ずっと寝てたんだ。

もう大丈夫だよ」

昨日とおどといは結婚の準備とパーティで、僕は風邪の理由で学校を休んだ。

まさか、本当のことは言えないよ。

この学園で僕の事情を知っているのは学園長と担任の先生だけだ。  
……あと小沢先生もいたんだっけ。

「岳史、休んでた間のノート、後で見せてくれる？」

「ああ、そういうえば昨日の現国自習だった。小沢が知り合いの結婚式とかで、午後からいなかつたんだ」

「……ふーん」

「新婦は俺達と同じ17歳だってさ。絶対、できちやつた婚だよな

！」

「…………」

本当に熱が出そうだ。

## 第六話

「紳一郎様は今夜はお仕事で遅くなられると、秘書の方からお電話がありました」

今朝と同じ場所に迎えに来てくれた車で朝吹邸に帰ると、メイドさんが僕に言った。

今朝、『なるべく早く帰る』って誰かさんは書いてなかつたけ?

……結婚2日目でこれだよ。

普通の新婚夫婦なら喧嘩になるのかもしぬないが、僕の場合は大助かりだ。

なるべく顔を合わせたくない。

おどといも会つてないし、昨日のパーティも招待客の相手で忙しくて、ずっと一緒にいたけどひくに話していな。

夜はすぐ寝ちゃつたし、今朝はふたりともギリギリまで寝ていたので朝の準備でバタバタしてて彼が出かけるときに少し話しただけだ。

僕はコジクさんが用意してくれた食事をとり、メイドさんが用意してくれたお風呂に入つて紳一郎さんと顔を合わせない内に寝てしまつた。早々とベッドに入つた。

昨日の疲れも取れない内に、今日も朝から学校で疲れることが続いて僕はもうクタクタだ。、

明日は土曜日で休みだから、ゆっくりできる。

「…………」

僕、紳一郎さんと結婚したのはいいけど、これからこの家で何した

らしいんだろう?

食事の支度もお風呂の仕度もお掃除もこここの使用人の人達がやってくれる。

『家のことは何もしなくていいよ。人手はあるからな。君はまだ高校生だから、今まで通り学業に専念してくれ。ただし、俺の花嫁だという自覚は持っていてくれよ?』

紳一郎さんは結婚が決まってから僕にそう言つたけど……。  
花嫁の自覚?

なんだかよくわからない。

僕は何か忘れているような気がしたのだが、考えるのに疲れてそのまま寝てしまった。

ベッドが大きく揺れたような気がした。

「冷たいな、普通夫の帰りが遅くなつても起きて待つてるもんどう?  
?新婚なんだから」

「ん?」

すごく近くで男の声が聞こえて、僕は目が覚めてしまった。  
眠い目を擦りながら声のした方を見ると、ワイシャツにネクタイを  
緩めた格好の紳一郎さんが、  
僕の隣で、肘をついて横になつている。

「あ、お帰りなさい。お仕事お疲れ様でした。…オヤスマニナサイ

「こり、寝るんじゃない」

紳一郎さんは僕が頭から被つた上掛けを引き剥がすと、上から覆いかぶさってきた。

「あの、重いんですけど……」

「……甘い匂いがするな。シャンプーか?」

彼は僕の髪に鼻を近づけて、クンクンと匂いをかいだ。

僕がお風呂に入る時に、メイドさんが『桃が好きだと伺いましたので』

と言つて、桃の香りがするシャンプーやボディソープを用意してくれた。

僕は『桃まんじゅう』が好きなだけで、特に桃にこだわってるわけではないんだけど……。

「ひゃ！」

紳一郎さんは、いきなり僕の首すじに顔を埋めた。

く、くすぐったい！舐めるな！吸い付くな！

彼の手が腰のあたりで怪しげに動きをしている。

「いや、これはもしかして……。

うつかり忘れてたけど、花嫁さんの仕事にはこういったことが含まれているんだった！

## 第七話

結婚3日目の朝が来た。

窓の外では、雀がチュンチュンと鳴いている。

……結論から言おつ。

昨夜はあれ以上何もなかつた。

ごめんなさい。

(誰に謝ってるんだ?)

あれから僕は覚悟を決めて、固く田をつぶつてまな板の上の鯉の状態でいたんだ。

震えていたかもしれない。

すると紳一郎さんは、黙つて僕の上から退くと寝室に備え付けのバスルームに行つてしまつた。

鯉(マグロ?)状態の僕に呆れてしまつたのだろうか?

よ、よかつた……。

だつて、やつぱり怖いよ。

会つてまだ一ヶ月の、それも男の人を相手にあんなことするなんて。

しばらくして戻ってきた紳一郎さんはまたベッドに入つてきたけど、もう何もしないで眠つてしまつた。

僕は緊張して起きてたんだけど、いつのまにか寝てしまつたらしい。

僕が目を覚ました時、紳一郎さんはすでにベッドにないなくて、クローゼットのある隣の部屋で出かける準備をしていた。

僕はベッドの中から、開けたままのドアから見える紳一郎さんの姿

を盗み見た。

昨日のこと怒つてないかな?

僕の視線に気づいたのか、紳一郎さんはネクタイを締めながらベッドに近づいてきた。

あれも本当は僕ががやらなくちゃいけないんだよね。

昨日の朝、紳一郎さんにせがまれてやつたのはいいんだけど、慣れないのと緊張したので力を入れすぎて

彼をネクタイで絞め殺しそうになつたんだ。

『今のは本気じゃないよな?』と怯えた顔で紳一郎さんに言われてしまつた……。

「起きたのか?」

そう言つて、紳一郎さんが僕の頬に手を伸ばすと、僕はビクッと体を震わせてしまった。

ま、まよい!

「……そんなに、怖がるなよ。昨日は悪かったよ」

彼は困った顔をして僕に謝つた。

「聞きたいことがあるんだが。

その……君はああいつとは初めてなのか?」

「……

恥ずかしいことを聞かないで欲しい。

情けないことに僕は今まで女の子とも付き合つたことがないんだ。

紳一郎さんは、何も答えられないでいる僕を見つめながら、じぶらぐ何かを考えていた。

「学校は今日休みだろ?」

そのまま休んでいいよ。見送りはいらないから

紳一郎さんはそう言って、僕を残して部屋から出て行ってしまった。

僕はしばらくぼんやりとベッドの上にいたのだが、慌てて起きて顔を洗いに行つた。

仕事に向かう夫を見送るのは僕の役目なんだ！

昨日も失敗だ。

ちゃんと起きて待つてなくちゃいけなかつたんだ。

僕が急いで着替えて、広い屋敷内を迷いながら玄関にたどり着くと、紳一郎さんを乗せた車はもう出てしまつた後だつた。

## 第八話

朝食を終えた後、メイドさんが僕の為に用意された勉強部屋に案内してくれた。

大きな机とパソコンと、本棚がいくつもあって、ちょっとした書斎みたいだ。

本棚には僕が実家から持ってきた本が、ちんまりと並べられていた。

「はあ……」

昨夜や今朝のことと思い出して、勉強が手につかない。

紳一郎さんみたいに派手に遊んでる人（小沢先生情報）には、僕みたいな、何も知らないマグロ初心者は面倒くさいのかな？

うわの空で参考書を捲つてると、ノックの音がした。

「どうぞ」

返事をすると、ドアが開いてメイドさんが大きなトレイを持って入ってきた。

「望様、お勉強は少し休まれて、お茶になさいませんか？」

「あ、ありがとうございます、えと…芦川さん」

この屋敷に来た時から、僕の面倒をいろいろと見てくれている若いメイドさんだ。

「あの、僕、何かお手伝いする」とはありますか？」

「お掃除とか……このお屋敷すごく広いから大変でしょう?」

僕は芦川さんが入れてくれた紅茶を飲みながら言った。

いくら家事は何もしなくていいと言われても、一日中ここで勉強をしてる訳にもいかない。

だいたいテスト前でもないのに、休日の朝から勉強なんてやりたくないよ。

「まあ…とんでもありません。私達が紳一郎様に叱られてしまいます」

「……それじゃあ、出かけてもいいですか？」

行きたいところがあるんですけど」

「それでは、お車の準備を致しますわ」

「え？ そんないいです！ 駅までの道を教えてくれれば、電車で行きますから」

「望様、

望様は朝吹グループの次期社長夫人なんですよ？

電車など使われて痴漢に遭われたり、誘拐されたりしたら大変なことになります！」

「はあ？ 痴漢はないとと思うけど

「いいえ！ こんなに可愛い方なんですよ！」

望様の新妻フェロモンにムラムラッとした男達がフランフラン…ああ！ 想像しただけでも怖ろしいですわ！」

新妻フェロモン？

「そういえば、あの、起きられて大丈夫なんですか？」

紳一郎様が、『望は今朝は疲れているから、まだ寝かせておくよ』  
に『と言られて、出かけられたんですけど…。』

昨夜は、よほど紳一郎様が激しくなさったんですねえ』

「は？」

「……まあ、私ったらはしたない！ 申し訳ありません！」

あの、それでは、お車をご用意致しますわね？」

芦川さんは、真っ赤な顔で僕に謝ると、逃げるよつて部屋から出て行ってしまった。

僕は田舎の店の前に立つて、ガツカリした。

『しばらく休業いたします』の札がさがっている。

いつから閉まつてたんだろう?

この一ヶ月バタバタしていて、ここ『モモタロ』に来ることができなかつた。

『モモタロ』は僕のお気に入りの桃まんじゅうを置いているお店で、毎週通つていたんだ。

小さいお店で、いつもおばあちゃんがお店番をしている。

通つてこるうちに話すようになつて、仲良くなつたんだけど。

おばあちゃん、もしかして病氣?

僕はおばあちゃんの顔を思い出して心配になつてきた。

もしやうなうお見舞いに行きたいけど、連絡先を知らないし……。

……おばあちゃんの笑顔を見て、癒されたかつたんだけどな。

## 第九話

その日の夕方、紳一郎さんから今夜も遅くなるといつ連絡をもらつた。

今夜こそ、起きて待つていなくては！

それからもし……もし今夜アレが始まつたら頑張らなくては！

昨日みたいなマグロでは駄目だ！

怖いけど、花嫁である僕の務めなんだから。

……でも、どうせつたらいいんだ？

「ん……？」

この香りなんだっけ？

いい香りだなあ……好きかも。

「望、そろそろベッドに行くか？」

いきなり耳元で囁かれた美声に、僕は鳥肌がたつた。

「あ、あれ？」

いつの間に帰つてきたのか、隣に紳一郎さんが座つてゐる！  
僕、ソファーで寝てた？

紳一郎さんの車が着いたら玄関に迎えにいくから教えてくれつて、  
芦川さんに頼んでおいたのに…。

「紳一郎さん、いつ帰つてきたんですか？」

「ん？ 30分くらい前かな？」

君の寝顔を肴に飲んでいたんだよ」

紳一郎さんは手に琥珀色のお酒が入つているグラスを持っていた。  
もう一方の手は、なぜか僕の腰に回つてゐる。

なんだか、すゞーく密着してる？

いい香りだと思ったのは、紳一郎さんがこつもつたてこる「ロロンの香り」だったんだ。

「可愛いなあ。俺にもたれかかって、寝言をブツブツ言つたぞ？」

「え？ 僕何言つてました？」

「マグロがなんとかつて。

……好物なのか？ ロックに言つて畠田の夕食にでも忠告せらる。

「…………」

「俺が帰るのを待つていてくれたのは嬉しいが、無理するひとはないんだぞ？」

夜更かしは美容に悪いからな。睡眠は充分にとらないと  
あの～畠田と言つてることが違うんですけど。

「悪いな、結婚したばかりなのに、ゆっくりできなくて。

今仕事が立て込んでいて、しばらくの間早く帰れそうにならないんだ。  
明日も休めないし……」

夜は遅いし、朝は早いし、いつ休んでるんだろう？  
なんだか、疲れてるみたいだ。

「僕のことには気にしないでください。あの……体に気をつけたださ  
いね？」

僕の言葉に、紳一郎さんはニッコリ微笑んだ。

「ありがと。……先にやすみなさい。俺はもう少し飲んでるから  
いいのかな？ お酒の相手をしなくても。

といつても僕はお酒は飲めないし、その前に未成年だ。

それに、今夜はアレはしないんだろうか？

「それじゃ……あの、おやすみなさい」「こさー

僕がそう言つてソファーから立ち上がりうつむくと、紳一郎さんがいきなり僕の腕を引っ張つた。

「あつ！」

バランスをくずした僕は、彼の広い胸に倒れこんでしまつた。

「…………ファーストキスはいくつの時？」

僕の体を抱きこんだまま、紳一郎さんが言つた。

「は？…………な、何でそんなこと聞くんですかー…

「言えなーいってことは、まだなんだな？」

図星だ。

だから、僕は今まで誰とも付き合つたことがなくてー

「ずっと男子校なんだろ？」

…………その顔で今まで無事だったとは意外だな  
紳一郎さんはそつ然と、ゆっくり顔を近づけてきて、僕の唇を塞  
いだ。

## 第十話

紳一郎さんは、唇を離して僕の顔をじっとみつめた。  
人の顔をこんなに近くで見るの初めてかも。

……つて、今、キ、キ…

頭の中で静かにパニクっている、

目の前の紳一郎さんが何か言つて、また唇を近づけてきた。

その時、

テーブルの上に置いてあつた紳一郎さんの携帯が鳴つた。

「…………」

しつこく鳴り続ける携帯を、紳一郎さんはしばらく無視していたん  
だけど……。

「……誰だ？ こんな時間に」

諦めたのかしぶしぶ携帯に手を伸ばし、相手を確かめて眉を顰めた。  
そして、通話ボタンを押すと、外国語で話し始めた。

……これって、フランス語？

紳一郎さん、フランス語喋れるんだ。さすが御曹司（？）

待てよ？

そういうえば昨日小沢先生が、紳一郎さんはフランス人のモデルと付  
き合つてたつて言つてなかつたつけ？  
もしかしたら、電話の相手はそのひと？  
……なんだかおもしろくない。

僕は胸の中がモヤモヤしてきた。

「お皿葉に甘えて、先にやすませてもうります。おやすみなさい」  
僕は聞こえるか聞こえないかの小さな声で挨拶をして紳一郎さんか  
ら離れると、ドアへ向かった。

名前を呼ばれたような気がしたのだが、振り返らなかつた。

結婚したからつておつき合いでやめたわけじゃないんだな。何が家庭に入つたら大人しくなる、だよ。

小沢先生のウソツキ。

……紳一郎さん達の世界では、愛人をつくることなんてあたりまえだつたりして。

ベッドに横になつてしまはうすると、紳一郎さんが寝室に入つてきた。

「…………望、寝たのか？」

僕は返事をしないで、寝たフリをした。

今はなんだか話をしたくないんだ。

紳一郎さんは溜息をつくと、バスルームに行つてしまつた。

「…………」

僕はベッドの中で、紳一郎さんの唇の感触を思い出した。

今更だけど、ドキドキする。

紳一郎さんにキスされてしまつた。

普通ファーストキスって、甘いとか聞くけど。

僕のファーストキスは、お酒と煙草の香りが入り混じつた大人のキスだつた。

朝、目が覚めると、昨日と同じ紳一郎さんはもうベッドにはいなかつた。

「起こしてくれたらいいのに……」

ベッドから降りて、顔を洗いに行ひうとしたら、寝室のドアが開い

てスース姿の紳一郎さんが入ってきた。

「おはよー、望」

「おはよーいわこせす……」

昨日のキスのことをして思って出して、まともに顔が見れない。

「望、これ」

紳一郎さんは僕に、持っていた薔薇の花束を差し出した。

「わざわざ温室で選んできたんだ。やっぱり君には薄いピンクが似合うな」

「はあ……」

寝起きの頭では、どうやらリアクションをしたらいつのかわからない。

僕はほんやりとそれを受け取り、田をつぶつて甘い香りがする花の匂いをかいだ。

……いや、なんとなく。

「……そんな可愛いくことするなよ」

「え?」

顔を上げて紳一郎さんを見ると、複雑そうな顔をしている。

彼は僕から花束を取り上げると、それをベッドの上に放り投げ、僕の体を強く抱きしめた。

そして、昨日よりもずっと長いキスをした。

「昨日も言つたが、しばらくは帰りが遅くなるんだ。

無理して夜中まで俺のことを待つていなくていいんだぞ?

もづ少しだら時間が出来ると思うから、その時は……

紳一郎さんは、ぱつとしてこの僕に向かって甘く微笑むと、

「覚悟しろよ!」

そつ言つて、寝室から出て行ってしまった。

結局、

僕は仕事に向かう紳一郎さんを、今日も見送ることが出来なかつた。この広いお屋敷を、迷わないでひとりで玄関まで行けるようになるのはいつのことだらう……。

## 第十一話

紳一郎さんの仕事は相変わらず忙しくて、帰ってくるのはいつも真夜中過ぎだ。

待つていなくともいいと言われてしまったので、僕だけ先にやすませてもらつてこる。

なので、顔を合わせるのは朝の短い時間だけだった。

同じベッドで一緒に寝てはいるが、キス以上のことはなんにもない。……キスだけでも僕はドキドキなんだけど。

電車通学は紳一郎さんからも却下され、迎えに来てくれた車で学校から帰ると

お客さんが僕を待つていた。

「アンリ・ジャンティル様です。紳一郎様の名刺をお持ちでした。秘書の方からも連絡がありまして、お約束なさつてるやうです。望様にもお会いしたいと仰つてるんですが……」

紳一郎さん、今朝は何も言つてなかつたけど……。

今日は早く帰つてくれるのかな?

僕はそのままお客さんのいる応接室に案内された。

応接室に入ると、その人は座っていたソファーから立ち上がった。

そして、僕の方に近づいてくる。

上品なデザインのスーツを着た、金髪に青い瞳の綺麗な男の人だ。

……『貴公子』ってこうこうひとのことを言つのかも。

ぼつと見惚れていると、彼は僕の正面に立つて微笑んだ。

「初めまして、ノゾミさんですね？アンリ・ジャンティールです」  
よかつた。日本語だ。

「初めまして、桃……朝吹望です」

お辞儀をすると、彼は僕に向かつて手を差し出した。

握手？

そうか、外国のひとだもんね。

で、握手をしたんだけど……。  
長い……。

アンリさんが手を離してくれない。

困つて顔を見ると、彼はなぜか僕の手をじーっと見ている。

「あの？」

「んー。可愛い手だなあ。すべすべしてて、指も綺麗だし。爪も桜  
貝みたいだ」

彼はそう言つて、いきなり僕をガバッと抱きしめた。

「わっ！」

「うん、いい抱き心地。細い腰だねえ。激しくすると壊れちゃうそ  
うだなあ。

シンイチロウは優しく抱いてくれる？」

「え……ええつ？な、何を……！は、離してください！」

僕はジタバタと暴れたんだけど、体はがつちりと彼の腕に拘束され  
ていて逃れられない。

「顔も可愛いし……唇はどんな味かな？」

アンリさんの綺麗な顔がどんどん近づいてくる。

キ、キスされる？

誰か助けて！

紳一郎さん！

## 第十一話

「望様！」

唇を死守しようと、必死に顔をそむけていると、メイドの芦川さんが僕達の間に飛びこんで、僕をアンリさんから引き離してくれた。

「申し訳ありません。私がついていながら……」

芦川さんは僕をギュッと抱きしめて言った。

「美形外人が嫌がるカワイイちゃんに襲い掛かる図なんてめったに見られないと思って、

ついウツトリ……いえ、その

見てたんなら、早く止めてよ！

「無礼者！」

芦川さんは、僕を抱きしめたままアンリさんに向かって叫んだ。

「このお方をどなたと心得る！

天下の朝吹グループの後継者、『朝吹紳一郎』の奥方様ですよ！こんな不埒な真似をして……。

ええい！頭が高い！ひかえおろし！

「……『ヒカラオロウ』ってどういう意味？

僕、五ヶ国語話せるけど、日本語が一番苦手なんだよね

空気が読めないのかわざとなのか、アンリさんは無邪気な顔で首を傾げた。

「黙りなさい！さあみんなーこの男を取り押さえるのよ！」

「はい！」

騒ぎを聞いて集まつて来た何人ものメイドさんが、芦川さんの声に一斉に返事をした。

嬉しそうに聞こえるのは氣のせいだらうか？

「何の騒ぎだ？」

その時、低い男の声がした。  
いつの間に帰つてきたのか、ドアのところに紳一郎さんが立つている。

秘書の人も一緒だ。

「……君達は何をしているんだ？」

紳一郎さんは僕と芦川さんを見て、眉を顰めた。

「離れなさい」

不機嫌そつな声だ。

「申し訳ありません！」

芦川さんは、慌てて僕の体を離して、さつきの出来事を紳一郎さんに話した。

黙つて聞いていた紳一郎さんの顔が、どんどん険しくなる。

「アンリ……貴様」

紳一郎さんは、アンリさんを睨みつけた。

そして、拳を握り締めてアンリさんの正面に立つた。

まさか……

な、殴つちやうの？

紳一郎さんの手が上がるのを見て、僕は思わず口を開けた。

「いひやいよ、ひんじひるい……」

妙な声が聞こえて、恐る恐る口を開けると、  
両方の頬っぺたを、紳一郎さんの手で思いつきつ引っ張られている  
アンリさんの姿があつた。

……美貌が台無しだ。

「まだヒツヒツする。あんなに思っておひで張ることないじゃないか。

僕のこの美しい顔にこんな事が出来るのは、世界中で君だけだよ？

シンイチロウ」「

アンリさんは冷たいタオルを頬にあてて、ブツブツと文句を言つてゐる。

「それだけですんで良かつたと思え。

俺が帰るのがもつ少し遅かつたら、わざとひどい用にあつていたかもしだれないぞ。

うちのメイドは、ほとんどが剣道や空手の有段者だからな。屋敷内の道場やトレーニングルームで毎日鍛えてるはずだ」

このお屋敷、道場まであるの？

知らなかつた……。

「……まあ、いいか。

本当はちょっとドキドキしたんだ。

いつもは絶対に触らせてくれない君のセクシーな長い指が、ずっと僕の頬に触れていたんだから。

……かなり痛みを伴つたけどね」

僕の隣に座つている紳一郎さんを窺がうと、すぐ嫌そうな顔をしている。

「望、用を合わせるんじゃないぞ。ここは男の手や指に欲情するヘンタイなんだ」

「シンイチロウ！そんな言い方はないだろ？」

まあ、否定はしないけどね

しないのか。

つまりアンリさんは手フュチの人なんだ。

そういうえば抱きつかれる前に、僕の手をジロジロ見てたつ。危険なひとだな。

なるべく近づかないよひにしなくちゃね。

「わっしゃ、ermenね、ノゾ!!」。

でも、あんなのは僕の国フランスでは普通の挨拶なんだよ?」

「はあ……

ホントか?

「君も何か護身術を習つたほうがいいかもしれないな。芦川君に言つて……いや、若い女性はマズイか」

「あ、岳史が柔道をやつてるから、教えてもらおうかな」

「……岳史って誰だ?」

「一番仲のいい友達です。柔道部に入つて、

僕、必ず試合の応援に行くんんですけど、とっても強くてカッコイイ

んです!」

「……」

紳一郎さんはなんだかムツとした顔をしている。

僕、何か変なこと言つた?

「ダメだよ? ノゾミ! シンイチロウの前で他の男のこと褒めちゃあ。

それとも、妬かせるためにワザと言つてるの? 小悪魔クンだなあ。

シンイチロウのハートを射止めただけのことはあるね

アンリさんがニヤニヤしながら僕に言った。

「黙れ、アンリ」

「え? 僕、そんなつもりじゃ……」

紳一郎さんが嫉妬なんかするわけないじゃないか。  
別に僕のことが好きで結婚した訳じゃないんだから。  
あの指輪のせいなんだから……。  
あれ？悲しくなってきた。なんで？

「のひとが変なこと言つから……。

僕は田の前で二コ二コしているアンリさんをちょっと睨んだ。

それにもしてもアンリさんでどういうひとなんだろ？  
紳一郎さんとは随分親しいみたいだけど。  
綺麗な人だけど、モデルさんだろ？  
フランス人なんだよね。

フランス？

「.....」

僕は、初めて紳一郎さんとキスをした夜にかかつてきた電話を思い出した。  
もしかしたら……

「アンリさんって紳一郎さんの愛人？」

## 第十四話

紳一郎さんが、飲んでいたコーヒーをブーゲと吹き出した。もろにそれを浴びたアンリさんが立上がりて何やら叫んでいる。たぶんフランス語だ。

「だ、大丈夫ですか？」

紳一郎さん、急にこじりこちやつたんだろ？

「ひどいよ、シンイチロウ。僕のこの美しい顔にこんなことが出来るのは、世界中で君だけだよ？」

アンリさんはパンパンしながら、わざわざまで頬を冷やしていったタオルで顔を拭つた。

紳一郎さんは咳き込みながらアンリさんに謝つてている。

「悪い、『ホツ、望が…へンなこと…』『ホツ…』

「え？ 僕？」

「なんでアンリが俺の愛人なんだ！」

「どこからねつこう発想になるんだ？[冗談じやないぞ！]

……つい、思つたことを声に出して言つてしまつてこたらしく。

紳一郎さんは腕を組み、怖い顔で僕を睨んでいる。

「だつて…小沢先生が」

「小沢？ あいつが何を言つたんだ？」

「……紳一郎さんはプレイボーイで、ついこの間までフランス人のモデルさんと付き合つていたって。

あと、女優さんと芸妓さんと……他にもたくさんいるんでしょ？」

なんだか尖った声になってしまった。

嫌だなあ。

まるでヤキモチやいてるみたいだ。

「……余計な事言いやがつて。

確かに君に会うまでは、何人か付き合っていたよ。  
だが、君との結婚が決まってからは全員と手を切つた。  
あたりまえだらう? 僕がそんな不実な男だと思つのか?」

「……」

「ねえ、いつぺんに何人の恋人と付き合つのは、不実つて言わな  
いの?」

「おまえに言われたくないぞ。

俺は自分から誘つたことはないし、むしろから勝手に寄つてくるん  
だ。

俺を独占することは出来ないし、お互に遊びでいいんならつて、最  
初にちやんと断つてから付き合つてるよ」

アンリさんが僕の方をチラツと見た。

「シンイチロウ……自分で墓穴掘つてゐつてわかってる?」

「……」

「だいたい、別れること、みんなちやんと納得してんの?

この間マリーに泣きつかれちやつたよ。なんで急にシンイチロウに  
振られたのかわかんないつてさ」

「ああ、何度も電話があつたよ。あんなにじつにいい女だとは思わな  
かつたな」

紳一郎さんは、冷たい声で言つた。

紳一郎さんつて……結構……最低だつたりして。  
微妙な顔をしていたんだろう。

紳一郎さんは僕を見て、気まずそうな顔をした。

「望。俺には君がいるのに、愛人なんてつくるはずがないだろう?」  
君だけだ」

僕をまっすぐに見つめる紳一郎さんの瞳は、とても真剣に見えるけど……。

## 第十五話

僕に嫌われたら面倒なことになるから、『機嫌を取る為にそんなこと言つのかなあ……』。

僕は、紳一郎さんの言葉を素直に信じることができなかつた。

「やうですか。

アンリさん、そのタオル取り替えてもらいましょうか？  
ほつぺた、まだ赤いですよ？」

「え？ ああ、シンイチロウのせいで汚れちゃつたしね。頼もうかな  
？」

「……サラッと流すなよ。確かに出会いはあんな形だつたが、俺は  
「何？ 何？」

君達つて、どうやって知り合つたの？」

アンリさんが紳一郎さんの言葉を遮つて身を乗りだした。

「こんなに可愛い男子高校生と知り合つにはどうしたらいいの？  
ぜひ、教えて欲しいなあ。

出会い系サイト？ それとも、デートクラブとか？

もしかしたら、援助交際が愛に発展したんだつたりして……

「え、援助交際？」

「……おい、望を侮辱するな」

紳一郎さんの冷たい声に、アンリさんは固まつた。

「シ、シンイチロウ、そんなに怖い顔しないでよ。

『冗談に決まつてゐじやないか……。あーまたジンジンしてきた』

アンリさんは誤魔化すように言つて、タオルで顔を覆つた。

「『一ヒーべれこ……』

〔冗談にしてもひどいよ。〕

確かに大企業の後継者の紳一郎さんが、只の高校生の、それも男の僕と結婚するなんて不自然だけど。

僕が花嫁に選ばれた理由は朝吹家の一部の人達しか知らないから、変に思う人は多いんだろうな……。

もし、あの桃まんじゅうを食べて指輪を見つけたのが他のひとだったら、

紳一郎さんはそのひとを花嫁に迎えていた筈なんだ。  
朝吹のおばあさんが決めたひとなら、誰だって良かったんだよね。  
僕じゃなくても……。

「望、何を考えているんだ？」

「別に……」

押し黙つた僕を見て、紳一郎さんはもう一度アンリさんを睨みつけた。

「シ、シンイチロウ！」

本題に入ろうじゃないか。

とりあえず、いくつか選んで持つてきたんだけど。

やっぱり特別にふたりの為にデザインした物の方がいいんじゃないのかなあ

のこと？

「俺達の結婚指輪だよ。

アンリは、ジュエリー・デザイナーだ。……只の知り合いで、変な関係じゃないぞ？」

「結婚指輪？」

そういうえば僕は結婚指輪を持つていない。

男同士で教会で式を挙げるのは難しいらしくて、僕達は結婚パーティしかしなかったんだ。

従つて指輪の交換とかもなくて、特に必要なかつたんだけど……。

パーティの時は、例の家宝の指輪をはめやらせられたんだっけ。

「君達の美しい指を、僕がデザインした指輪で飾ることが出来るなんて

考えただけでゾクゾクするよ……」

アンリさんが目を閉じてうつとうと言った。

……紳一郎さん、人選を誤ったんじゃないの？

## 第十六話

僕達は、アンリさんが持つてきた数種類の指輪を見せてもらつた。何の飾りもないシンプルなものから、小さな宝石が埋め込まれているものまである。

「望、君はどうがいいんだ？」

「え？……僕、指輪つてよくわからなくて……紳一郎さんが選んでくれださー」「

「……そうだな。これなんかいいんじゃないか？」

紳一郎さんが選んだのはシンプルなデザインの指輪だった。

「えー。それにするの？つまんないなあ。

僕にまかしてくれよ。君達の為に最高のマロッジリングを「デザインするから。

それで……よかつたら君達の手の写真をとらせてくれないかな？  
あ、できたら型も取らせて欲しい。イメージを膨らませるのに必要なんだ！」

アンリさんはソファーから身を乗りだして、紳一郎さんに訴えた。  
僕は、アンリさんが紳一郎さんの手を形どった石膏に頬擦りする怖い姿を一瞬想像してしまった。

「断る」

紳一郎さんは冷たい声でアンリさんに答えた。  
「だよね。

「そんなんあ～」

アンリさんは、しばらぐの間いろいろと理由をつけて紳一郎さんに哀願していくけど無駄に終わつた。

結局、結婚指輪は最初に紳一郎さんが選んだ物に決まった。

「それじゃあ、裏に入るのはイニシャルと日付だけでいいんだね？」

出来上がつたら、連絡するよ。

それにしても、シンイチロウがいきなり結婚だなんて、連絡もちらつて驚いたよ。

水くさいなあ。何で教えてくれないんだよ。結婚パーティにも出たかったのに。

リュウも何も言つてなかつたんだよ？」

アンリさんから出た名前に紳一郎さんの表情が変わつた。

「龍一に会つたのか？」

「うん、半月くらい前かな？パリでね。彼、春から向こうを任せされてるんだって？」

「……アンリ、俺の結婚のことは、望が学生の間はなるべく公にしてたくないんだ。

だから君もこのことは伏せておいてくれ。龍一にも何も言わないでいてくれないか？」

「え？ 彼、知らないの？ 一応従弟でしょ？ 結婚パーティには呼ばなかつたの？」

「ああ、親戚連中にも口止めしておいたよ。絶対にあいつには知らせるなつてね」

「…………うーん、それは正解かもね。」

リュウつて、シンイチロウの恋人を寝取るのが趣味だから、もしかしたらノゾミも危ないかも……。

奥さんだからつて遠慮するとは思えないなあ。それどころか知つたら俄然やる気だすかもね。

彼つて口がうまいから、皆騙されちやうんだよね。まあ飽きたらポイされるけどさ」

「…………あいつは昔から俺の嫌がることをするのが大好きなんだ。

今まで見て見ぬ振りをしてきたが、望にまでちよつかいだされるのは」「めんだ」

紳一郎さんは不愉快そうに言つた。

な、なんか今『寝取る』とか、『飽きたらポイ』とか聞こえたけど  
……。

その龍一さんは、最低だなあ。

紳一郎さんは、まだましなほうなのか？

「まあ、ばれるのも時間の問題かもしれないけどな。  
とにかく今は俺達のことを誰にも邪魔されたくないんだ」  
紳一郎さんは僕の方を見ながら言った。

「ココウはバイじやないから、今まで狙うのは女性ばかりだったけ  
ど……

ノゾミは女の子みたいに可愛いし、油断は禁物だ！  
ノゾミ、君はシンイチロウの大変な『オクガタサマ』なんだから、  
他の男に絶対に隙を見せたらいけないよ？  
いいね？」

「…………はい」

## 第十七話

「失礼致します」

ノックの音がしてメイドさんが入ってきた。

「紳一郎様、秘書の方はお車でお待ちになるそうです」

「……ああ、時間か。」

悪いが、今から社に戻らなければならぬんだ。

今夜も遅くなるだろうな……」

紳一郎さんは腕時計を見て、溜息をついた。

なんだ。

また会社に戻っちゃうんだ……。

あれ? なんだろ、このガッカリ感は。

「あいかわらず、忙しそうだねえ。

ちょっと痩せたんじゃない?」

「ここ一ヶ月、スケジュールが日一杯詰まってるんだ。

おかげで、望と過ごす時間が全然とれない。

秘書に文句を言つたら、いきなり結婚を決めたりするから調整がで  
きなかつたんだと怒られたよ。

……まあ、来月ぐらいには余裕が出来るだろつ。  
さて、行くか。

アンリ、もう用事は済んだからおまえもむけっと帰れ

紳一郎さんが手で追い払う仕種をすると、アンリさんは唇を尖らせ  
た。

「冷たいなあ。

もつとノゾミと話したいのに……。

そうだ、ノゾミ、庭を案内してくれない？

朝吹邸の庭と温室は、海外でも有名なんだよね

「え……僕がですか？」

無理だ。

この間、庭師のひとに案内してもらつたけど、  
ここのお庭は植物園みたいに広くて、どこをどう歩いたのか全然覚  
えてない。

「何考てるんだ。図々しい奴だな。駄目に決まってるだろー。」

「……やっぱり駄目か。

わかった。今日は諦めるよ。

ノゾミ、会えて嬉しかったよ。

ああ、そうだ。今度、朝吹家の家宝の指輪を見せてくれないかな。  
もちろん結婚パーティではお披露目したんだよね？  
最高級のダイアモンドで、噂によると軽く億の値がつくとか

「お、億！？」

家宝の指輪なんだから高いんだろうなーとは思つてたけどそんなに  
するの？

そんな高価なものを桃まんじゅうなんかに忍び込ませるなんて、  
なくしたらどうするんだよ。

朝吹のおばあさんってチャレンジジャーだな。  
うつかり飲み込んだりしなくてよかつた。

紳一郎さんが立ち上がったので、僕もつらわれるようにして立つた。  
ちゃんとお見送りしないとね。

「ああ、見送りはいいよ。まだ着替えてもいいじゃないか。

今日はこんなヘンタイ男につきあわせて悪かったな

紳一郎さんはそう言って僕の頬を優しく撫で、唇を重ねてきた。

アンリさんが田の前にいるの...。

メイドさん達もまだこの部屋にいるんだよ...。

焦っている僕をよそにキスはどんどん深くなつていぐ。  
窒息しちゃうか...。

紳一郎さんがやっと唇を離してくれた時には、僕はもう失神寸前だつた。

「君達へみせつけないでくれよ

「つらやましいだろ？おまえも早くまともな人間になつて嫁をもらはうんだな。

それじゃ、望、行つてくるよ

「また会おうね。ノゾミ」

紳一郎さんとアンリさんは応接室から出ていってしまった。

僕はまたソファーに座つこんでしまつた。

ただでさえ紳一郎さんにキスをされると、頭の中がふわふわして、胸がドキドキするんだ。

それなのに、あんなハードなキスをされたら、体中の力が抜けちゃつて....。

「.....」

僕は、この結婚を1年間我慢したら、さつと離婚して実家に帰るつもりだった。

だって、紳一郎さんは僕を脅して結婚を強要するこわいひとなんだ。

そんなひと、好きになるはずがないと思つたんだ。

でも……。

朝の短い時間にしか紳一郎さんと会えないのはなんだか淋しいなと思つたり  
抱きしめられたりキスされたりするとビックリしたり  
紳一郎さんと付き合っていたひとことが気になつたり

これって……

もしかしたら僕、紳一郎さんのこと好きになつたやつたのかな?

## 第十八話

「あれ？モモ、弁当食わないのか？」

「うん、なんか食欲なくて……。今日は牛乳だけにする。

岳史、これ食べてくれない？」

「いいのか？へえ、うますう。

……おまえの弁当、最近豪華だよなあ」

「……そうちかな？」

毎朝、朝吹邸のコックさんが作ってくれてるからね。

それなのに、岳史にあげちゃってごめんなさい。

でも、残すのも悪いし、捨てるなんてもつと悪いもんね。

牛乳のストローを銜えたままぽつりとしている僕を見て、岳史が怪訝そうな顔をした。

「……おまえ、最近変だぞ？」

ほんやりしていることが多いし、おまけに食欲がないだつて？」

岳史はそこまで言つてにやつと笑つた。

「ははーん。わかった。恋煩いだろ？」

「……」

自分の顔が赤くなるのがわかつた。

あの日。

自分の気持ちを自覚して以来、僕は変なんだ。

紳一郎さんの顔が、見られなくなってしまった。

意識しそぎぢやうつていうか、話しかけられてもまともに答へられないし、

朝のキスの時も、前よりずっと緊張してカチンカチンになつたりやう

んだ。

……紳一郎さん、僕のこと変なヤツだと思つてゐるだらうな。

「なあ、どんな娘なんだよ

「誰が？」

「おまえの恋煩いの相手だよ。可愛いか？」

「可愛いっていうか……カツコイイかな？」

「カツコイイ女？年上か？環さんの友達とか？」

「えーと……」

「桃田！先生が呼んでるぞ！」

「え？」

クラスメートに呼ばれて声のした方を見ると、担任の山口先生が僕に向かつて手招きをしている。

「何だろ？」

席を立つて先生の傍まで行くと、先生は周りに聞こえないような小さな声で僕に言った。

「今から応接室に行つてくれ。学園長専用の方だ」

「は？」

「おまえにお客さんだ。朝吹家の関係者の方らしいぞ」

朝吹家の？

誰だろ？

……まさか、おばあさんじゃないよね？

僕はドキドキしながら、急いで応接室に向かつた。

応接室のドアをノックすると、中から返事が聞こえた。

「失礼します……」

おそるおそるドアを開いて中に入る。

朝吹邸ほどじゃないけど、広くて立派な応接室だ。

学園長専用だもんね。

応接室のソファーには、スーツ姿の若い男性がひとりで座っていた。  
……学園長はいないみたいだ。

「学園長こな席をはずしてもらつたよ。  
君とふたりきりで話をしたくてね」

男性はそう言ってソファーから立ち上ると僕の前まで来た。  
近くで男性の顔を見て、僕の胸はドキンと鳴つた。  
このひと……紳一郎さんに似てる？

「初めまして、朝吹望君。

香月龍一です。

一応、朝吹紳一郎の従弟なんだけど……  
結婚パーティーには出席できなくて残念だつたな」  
彼はにっこりと微笑み、僕に向かつて手を差し出した。

## 第十九話

香月龍一。

龍一?

この間紳一郎さん達が話してた『寝取つてポイ』のひと?

僕は差し出された手を見た。

アンリさんの時と同じパターンだよね。

数日前の嫌な記憶が甦る。

まさかこんなところで変なことはされないと思つけど……。

ためらつていると、香月さんは自分から僕の手を取った。  
そして、外国の女のひとにするように唇を押し付けてきたんだ。

「わあっ！」

僕は慌てて自分の手を取り戻した。

そんな僕を見て、香月さんはくすくす笑つている。

「顔が真つ赤だよ？ウブなんだなあ。

君、本当に17歳？

紳一郎が男子高校生を花嫁にしたつていうから、もつと大人っぽくて色っぽい子を想像してたよ」

色っぽい男子高校生ってどんなんだよ……僕には想像できないよ。

「立ち話もなんだし、座ろうか？」

僕は香月さんに促されてソファーに座つた。

「そんなに脅えた顔しないで。

昨日までフランスにいたので、つい、ね。

あんなのは向ひでは普通の挨拶なんだよ？」

ホントか？

アンリさんとおんなじこと言つてるよ。

それに普通は男相手にあんなことしないよー。

このひと、何しに来たんだわ……。

僕をわざわざ呼び出したりして何を話すつもり？

「どうぞ」

どんな態度をとったらいのかわからなくて黙つていると  
香円さんは、テーブルに用意されていた紅茶をカップに注いで勧め  
てくれた。

「あ、ありがとうございます。……すみません」

……お客さんにお給仕をやらせてしまった。

僕、朝吹邸で暮らすようになつてから、なんでもメイドさんになつ  
てもううのがあたりまえになつてた。  
いけないよね……。

申し訳なくて小さくなつてこる僕を見て、香円さんはクスリと笑つ  
た。

「どういたしまして」

「…………」

僕は香円さんの柔らかい笑顔に、つい見惚れてしまつた。  
だつて、笑うともつと似てるんだ。  
重症だ。

紳一郎さんに似ているひとを田の前にしただけでどきどきするなん  
て。

香月さんは紅茶をひと口飲んで、じっと僕の顔を見つめた。  
思わず身構えてしまう。

「急に訪ねてきたりして悪かったね。  
あの紳一郎が結婚したって聞いて、どうしても花嫁に挨拶したくて  
や。

どうこうわけか、結婚パーティには招待されなかつたんだよなあ。  
どうしてだと思う?」「……

「……」  
僕に聞かれても……。

それはあなたが『寝取つてポイ』のひとだから、紳一郎さんが警戒  
してるんです……  
なんて言えないよ。

## 第一十話

「わざわざフランスから僕を呼び寄せるのも悪こと思つたのかなあ。でも、報告べらざしてくれてもいいのにね？あいつとは従兄弟同士で、

子供の頃からの付き合つなのが」

「……」

返事をすることができないでいると番円せんは小さく笑つた。

「さつきからマコゲがハの字になつてるよ？」

困らせちゃつた？君は思ったことが顔に出るんだね、素直で可愛いなあ。

気に入つたよ」

「え、気に入つてもらわなくとも結構です！」

「紳一郎がうらやましいよ。

こんな可愛い子を花嫁にするなんてさ。

で、あいつとはどうやって知り合つたの？

どうして、そんなに急いで結婚したの？

君はまだ高校生なのに、学校を卒業してからでも遅くはないんじゃないの？」

続けざまに困つた質問をされて、僕はますます窮地に追い込まれてしまつた。

紳一郎さん作の、僕達が結婚に到るまでの物語（僕の両親に話したヤツだ）を

話せばいいんだろうけど、僕は嘘をつくのは苦手なんだよ。

それに、人が良くてちょっと単純なうちの両親と違つて、このひとには通用しないような気がする。

「言えない理由でもあるのかな？」

まあ、無理には聞かないけどね。

……でも、男の子を朝吹家の花嫁に選ぶなんて紳一郎も思い切ったことをするなあ」

やつぱりみんなそう思つよね……。

「次の後継者はどうするつもりなんだろうな。君、何か聞いてる？」

後継者？

そつか、今は紳一郎さんが朝吹グループの後継者だけど、その後は紳一郎さんの子供が継ぐのが当たり前だよね。

「ああ、愛人に産ませるとこつ手もあるか。……『めん、嫌なことを言つたね』

「紳一郎さんは、愛人はつくれなにって言つてました。……ほ、僕だけだつて」

「……望君。

こんなことを言つるのは可哀想だけど

覚悟はしておいた方がいいよ？

今はまだ親戚連中は何も言わないだろうけど、何年か後にこの問題は必ず出てくる。

本家の血筋を絶やさないよう努めるのは、朝吹家の長男である紳一郎の義務だ。

君が相手では無理だろ？

「…………」

「あいつが、そんな大事なことを忘れている訳がないと思つんだけどな。

……君達がどうこう経緯でスピード結婚することになつたのかは知

らないけど、

紳一郎のことを好きだから結婚したんだよね？

あいつが他の女との間に子供をつくることになつても平氣でいられるかい？」

僕は香月さんの質問に答えられなかつた。

「……僕は君が傷付くのを見たくないな」

紳一郎さんは、後継者のことなんて何も言わないけど。  
大事なことだよね。

もし、この先紳一郎さんが後継者のことを考えて誰かを愛人としても  
僕、何も言つ権利はないんだ。

……僕は女の子じゃないから。

## 第一十一話

「……弱つたな。望君、大丈夫?」

『氣遣つよつな声がすゞく近づくで聞こえた。

「すまない。僕の言つたこと、そんなにショックだった? 颜色が悪いよ?」

番円さんは心配そうに、僕の顔を覗き込んだ。

『ぎょつとして思わず体をひいてしまつ。

紳一郎さんに似ている顔でそんなに接近しないでほしい。つて、わざまで正面にいたのに、いつの間に僕の隣に移動してゐんだよ!!』

「望君?」

番円さんは固まつてゐる僕の名前を呼んで、慰めるよつて(?)肩に腕を廻してきた。

……さつきから思つてたんだけど、このひと紳一郎さんと回り番つけてくるよね?

そのせいなのか、体に力が入らない。は、離れなくっちゃ!

……と思つてゐるのに、番円さんの腕の力が強くて動けないよ。

『君はシンイチロウの大重要なオクガタサマなんだから、他の男に絶対に隙を見せたらいけないよ?』

アンリさんがせつかく忠告してくれたのに、僕つてヤツは!-

「！」、香円さん！あの、離れてくれませんか？」

「……君、甘い香りがするね」

そう言つて、香円さんは僕の顎をすくい、顔を近づけてきた。

アンリさんの時と同じパターンじゃないか！  
ううと、あの時よりもっとまろい状況だよ。  
助けてくれる芦川さんもいない！

「おーい。それはちょっとシャレにならないんじゃないの？」

その時、からかうような男の人の声が聞こえた。

声の主を探すと、腕組をした小沢先生がドアの前に立つている。

「せ、先生！」

香円さんの腕の力が抜けて、僕は慌ててそこから逃げ出した。

「ノックの音は聞こえませんでしたけどね……」

「あ、忘れてた」

小沢先生はそう言つてコソコソとドアをノックした。

「相変わらずですねえ、小沢先輩」

香円さんが溜息をついた。

「教師になつたとは聞いてましたけど、この学校にお勧めだったんですけど。」

一流の大学を首席で卒業したのにもつたといつて、皆が言つてますよ。

「お父様の会社は継がれないんですか？」

「ふん、面倒くさい。」

教師になるのはガキの頃から決めてたんだ。

俺はこの学校を卒業して偉くなつた教え子達に、同窓会でチヤホヤされるのが夢なんだよ！

財界や政界で大物になつた教え子達が、ヨボヨボのじーさんになつ

た俺に感謝の言葉を伝えるんだ。  
俺はシワシワの顔に涙を零し……」

「あの〜。先生、僕、教室に戻つていいですか？」

将来の夢を熱く語る小沢先生に、僕はオズオズと声をかけた。

「おつと。そんな話はどうでもいいんだよ！」

おい、こいつは紳一郎の大事な花嫁なんだ。

手なんか出したら、紳一郎に殺されるぞ？」

「そうかなあ？」

紳一郎の恋人達とは僕も仲良くさせてもらいましたけど、いつも涼

しい顔してましたけどねえ」

「……そいつらとは、本気じゃなかつたからだよ」

香月さんは僕の方に視線を向けた。

「へえ、望君には本気なんだ？」

「おう！紳一郎とこいつは運命の出会いをして結ばれたんだ！  
深く、熱く、愛しあってるんだよ！」

……な？」

「え？」

「え？」

いきなり小沢先生にふられて、僕は何て答えたらいつかわからな  
い。

だから、僕は嘘をつけない性格なんだよ……。

## 第一十一話

「……そつなんです。僕と紳一郎さんは運命的な出会いをして（齧）されて（）結婚する」とこなつたんです」

嘘は言つてない。

「運命の出会い？……ふつむ」

香月さんが探るよひな田で見たので、僕は視線をそらせた。

「香月、おまえの悪癖はよく知ってるが、  
こいつにまでちょっかい出すのはやりすぎだぞ？  
それに桃田は俺の大事な教え子で、変な虫がつかないよひにしつか  
り見張つといて  
くれつて紳一郎に頼まれてるんだ。  
あいつはなあ、怒つたらものす」「おく怖いんだぞ？  
校内でこいつになんかあつたら、どんな田に合わされるか……。  
俺、絶対成敗される！」

小沢先生は自分の体を抱きしめるよひにしてぶるぶると震えた。

小沢先生、時代劇じゃないんだから……。

「紳一郎のことが氣に入らないからつて、桃田を利用してあいつを  
挑発するのはやめてくれよな」

小沢先生が香月さんを睨みつけながらビシッと言つと、香月さんは  
肩を竦めた。

「なんでみんな誤解するんだろうな。僕はあいつのこと、嫌いじ

やないですよ？

昔から自慢できる従兄だと思つてます。ただ、僕は紳一郎が持つてゐるもののが、何故かどうしても欲しくなるんですよえ。

物でもひとつ……。自分でも悪い癖だとは思つてゐるんですけどね」

香円さんは呟きながら僕の方を見た。

なんだか、嫌な予感。

「望君に会いに来たのは、別に彼に何かしようつて訳じゃなくて、本当に只の挨拶のつもりだつたんですよ。『結婚なんてまだま studs る気はない』なんて公言していた紳一郎が、

電撃結婚でしょう？ それも相手が男子高校生だなんて、気になるじやないです。

どんな子があの紳一郎を射止めたのか、知りたかつただけなんだけどなあ」「

「はあ？ ジャあ、なんだよ、さつきのは。

俺が止めなかつたら、あのままこいつにチューしてただろ！？

紳一郎に対する嫌がらせじやねえか。おまえ男には興味なかつただろ？ バリバリの女好きのくせに！」

「……確かにね。いくら紳一郎の相手でも、さすがに男に手をだそ うとは思わなかつたですね。

でも、望君の困つた顔や泣きそつた顔を見ていたら、柄にもなく胸 がときめいてしまいましてね。

ああ、そうだ。先輩、知つてます？

彼、とてもいい香りがするんですよ。さつき肩を抱き寄せた時に氣 づいたんですけど

「香り？ 桃田、おまえ何か変なフェロモンでも出してんのか？」

小沢先生はそう言って、僕の傍までくると鼻を近づけてくんくんと

犬みたいに匂いを嗅いだ。

「わつ…や、やめてください…」

なんで紳一郎さんの知り合について、僕になんことばっかりするんだよ…

「ほんとだ。うまそう匂いがする…

おまえ、そんな甘い香りふんふんをかいで校内をウロウロしたら、絶対誰かに喰われるぞ?」

危ないから気をつけろ、と小沢先生は厳しい顔つきで僕に言った。

「はあ?」

甘い香り?

芦川さんお勧めの桃シャンプーのせいかな。  
僕も最初は気になつてたんだけど、だんだん慣れて何も感じなくなつてたよ。

……喰われるって、ビリコウリだよ?

「その甘い香りが僕を誘つているよつて思えて、ついついつラフラフ引き寄せられてしまつてね。

齧えている顔にもそそられたし……つまり、魅力的な顔が悪いんだよ?」

香川さんはいつも僕に向かつて微笑んだ。

な、何わけわかんなこと言つてるんだよ、このひとは…  
なんで、僕が悪いことになつてんの?

「ところで、なんで紳一郎の結婚のこと知ってるんだ？ 桃田が学生の間は絶対に外に漏らすなって緘口令が布いてあつた筈だぞ？」

「僕だつて朝吹家の一員なのに、教えてくれないなんて冷たいなあ。紳一郎の恋人のひとり……いや元恋人か。フランス人のモデルでマリーという女がいるんですけど」

聞き覚えのある名前が出てきて、ドキッとした。

この間アンリさんが言つてたひとだ……。

「彼女、パリのオフィスに乗り込んで来ましてね。

紳一郎に捨てられたからどうにかしてくれつて泣きつかれましたよ。いくら従兄弟だからって、僕にそんなこと言われても困るんですけどねえ」

「おまえ達、知り合いだったのか？」

「ああ、以前ちょっと口説いたことがあるんですよ。振られましたけどね。」

彼女、紳一郎にかなり本氣だつたみたいですよ？ 絶対に他の女達を出し抜いて、プロポーズさせてみせるつて宣言してましたからね」

「フランス人のトップモデルなんて、プライド高そうだもんなん……」

「まあ、それはともかく、彼女に聞いたんですけど、紳一郎、付き合いのあつた全員を一斉に整理したんでしょう？」

それも短期間に慌ててバタバタと。

だからマリーみたいな面倒な女が出てくるんですね、スマートな紳一郎らしくないなあ。

変だと思つたんで、わらの母親に電話してカマかけたら、男子高校

生と結婚したことであつたり白状してくれました

「は～、あいつもおまえだけには知られたくなかっただろ？になあ。

こんなに早くバレるとは……まあ、自業自得か。

それで、何いつの顔を見にわざわざ帰国したのか？おまえも暇だなあ

あ

「実は本当の目的は違うんですよ。

仕事のこともあるんですけど、母からおばあちゃんの具合が悪いと聞いて、お見舞いに行こうと思いましてね。

珍しく国内の別荘で静養されているから

「ああ、紳一郎の結婚パーティにも出られなかつたんだよなあ。楽しみにしてただろ？」……。

前に会つた時はムチャクチャ元気そうだつたけど、年も年だしな……。

おい、香月、ばあちゃんの孫で結婚していいのはもつおまえだけだろ？

いつまでもフワフワしてないで、早く落ち着いてばあちゃんを安心させやれ！

でないと手遅れになつて後悔する事となるわ？

小沢先生は教師モードになつて、香月さんにお説教を始めた。

「……縁起でもない」とを言わないでくださいよ。

それに、余計なお世話です。相変わらずおせつかいな方ですね」「なにい？」

「あの～」

僕は険悪な空気になつてきたふたり、「おやおやおやおや」と

「僕、もう失礼していいですか？5時限目が始まっちゃう……」

「あ、いけね！とつぐに授業始まつてるんだよ。

おまえを迎えて来たんだつた

「え？」

僕は慌てて応接室の時計を見た。

本當だ。

この部屋チャイム聞こえないの？

「教室におまえがいないから氣になつてな。

真面目なおまえがサボるわけないし、山口先生に朝吹家から面会人が来てるつて聞いてピンときたんだ。

屋敷じゃなくて、わざわざ学校までおまえに会いに来る関係者なんて怪しいからな」

「朝吹邸に行つても簡単には会わせてくれないんじやないかと思いましてね。

それに、あそこでは誰にも邪魔されずに彼とふたりで話すのも難しそうだし」

香月さんはソファーから立ち上ると僕に近寄つてきた。微かに口ロンの香りがする。

さつきのこともあって緊張してしまつよ。

今は小沢先生がいるから大丈夫だろうけど。

「さつきの話だけど、本当に悪かつたよ。

除け者にされたので、悔しくてね。

つい、君に意地悪をしてしまつた。

あんなこと言つたけど、紳一郎は君を悲しませるよつな」とはしないんじゃないかな？

大事にされてるみたいだしね

香月さんはそう言って僕の隣で睨みをきかせている小沢先生に視線を向けてた。

「さて、そろそろ失礼します。

望君。今日は途中で邪魔が入ってゆつくり話せなかつたけど、  
パリに帰る前に、改めて朝吹邸に挨拶に寄らせてもらつことある  
よ。

紳一郎にもよろしく伝えといってくれないかな？

『結婚おめでとう。可愛い花嫁でとても羨ましい』ってね

## 第一一十四話

「――ゴーラーク?」

「はい。今朝、望様が出られてすぐに紳一郎様からお電話がありました。

急な出張で向ひに行かれたことになつたそうです

「そう……」

今日のこと、紳一郎さんにはなんふうに報告したらいいのか、ずっと悩んでたんだけど……。

気が抜けちゃつたよ。

「望様には、あちらに着いてからお電話されるそうですね」

「紳一郎さん、お仕事大変なんですね。体壊さないといいけど。

……芦川さん、どうしたの? 怖い顔して

いつもは僕が帰ると笑顔で迎えてくれる芦川さんなのに、今日はなんだか不機嫌そうだ。

「あんまりですわ! 新婚だといつのこと一日もお休みをとられないばかりか、お帰りも毎日真夜中!」

そのうえ、いきなり海外出張ですって?あの秘書、きっと紳一郎様を過労死させるつもりなんです!」

芦川さんは、僕から受け取った通学鞄をギュッと抱きしめて叫んだ。

毎朝紳一郎さんを迎えてくる秘書のひとは、

紳一郎さんと同じくらいの年齢で、背が高くて、眼鏡をかけて、ハンサムだけど冷たそうなひとだ。

僕には丁寧に接してくれるけど、何を考えているのかわからなくて、ちょっと近寄りがたい感じ?

「……それに紳一郎様も紳一郎様です！結婚なさる前からお忙しい方でしたけど、

それでも余裕で複数の方とおつきあいなさっていました！  
望様おひとりのお相手もできないなんて、どういうおつむりなんでしょうか！？」

「…………

「……あ、私ったら何てことを……申し訳ありません！」

芦川さんは僕の顔を見て、慌てて頭を下げた。

「ううん、芦川さん、僕の為に怒ってくれてるんですよね？」

僕は平気だから。紳一郎さんのお仕事が忙しいんだから仕方ないです」

「…………望様」

芦川さんはしょんぼりとしてしまって、こっちが氣の毒になってしまつ。

「芦川さん、僕、このまま勉強部屋の方に行つていいいですか？先に宿題を済ませようと思つて。あ、案内はいいですか？」

「わかりました。後でお茶をお持ちしますわね。

でも、本当におひとりで大丈夫ですか？」

芦川さんは、鞄を僕に渡しながら心配顔で尋ねた。

一週間前、屋敷内で迷子になつたことを思い出したんだろう。

「大丈夫です……たぶん」

僕は部屋に入るとカーテンと窓を開けて、勉強机の前に座つた。  
今日はなんだかいろいろあつて疲れちゃつたよ……。

勉強部屋はこの屋敷で一番心休まる場所なんだ。

紳一郎さんは僕の為に豪華な部屋を用意してくれたけど、値段を聞くのも怖いような家具や骨董品が置いてあって、自分の部屋だとこいつのすぐ隣張してしまつ。

それに比べたらこじこには実家の僕の部屋と同じくらいの広さで、余計な装飾品とかもなくてホツとするんだ。

机の上に地球儀を置いて、クルクル回しながら「ヨーヨークを探した。

「ヨーヨークまで、どれくらいかかるんだろう。紳一郎さん、まだ飛行機の中だよね。  
いつ帰ってくるのかな……」

## 第一一十五話

翌朝。

朝食を取つて、芦川さんが小さなトレイに電話の子機を乗せて持つてきた。

「望様、紳一郎様からお電話です」

「え！？あ、あいがといひ、「あこます」

僕はドギマギしながらそれを受け取った。

今までだつて紳一郎さんと電話で話したことはあるのに、なんでもこんなに緊張するんだ？

「も、もも、もしもし。」

『望か？』

こんな時間に電話してすまない。もう出かけるんだろう？  
こっちに着いてすぐにかけるつもりだったんだが、寝ていると悪い  
と思ってね』

「……いえ。まだ大丈夫です」

昨日は、紳一郎さんからの電話を待つて遅くまで起きていた事は内緒だ。

『何か変わったことはないか？』

昨日の番円さんのこと、頭をよぎったけど、電話で話す「じゅう  
いよね？」

「……何もありません。」

あ、あの、お仕事頑張つてくださいーーー、あ、でも無理はしないでください

『えー！』

……そんなこと言わぬくてもわかってるだろ？など、氣のきいた  
言葉が見つからないよ。

受話器から小さな笑い声が聞こえた。

『飛行機が揺れて眠れなかつたうえに、着いた早々ミニーティングで実は少々へばつてたんだ。』

でも、君の声を聴いて元気が出たよ。……いや、それより、生まれて初めてホームシックにかかりそうだな』

『…………』

『冗談だとわかつていても、そんなこと言われたらドキドキしてしまふ。』

『望？ わつとき芦川君に聞いたんだが、最近あまり食べないそつだな。体調が悪いのか？』

『え？ そんなことありません！ 元気です！』

『それならいいが……。ああ、ついでに彼女に叱られたよ、まいつたな』

「え？」

あの紳一郎さんを叱つた？

芦川さんってすごいなあ、只のメイドさんじゃないよ。

でも何を？

『ああ、そりそり切らないとな。

明日の便で帰るよ。そっちに着くのは……明後日の晩過ぎになるだろうな』

『はい。わかりました』

よかつた。明後日は日曜日だ。

『さうだ、芦川君に伝言を頼みたいんだが、いいか？』

『はい』

『望のことば、出張から帰つたら充分に可愛がるつもりだから安心してくれ、だ。

それじゃ』

「はー！

……え？え？も、もしもじっ紳一郎さん…？』

切れてる……。

今なんて言つた？

「望様？どうかなさいました？」

芦川さんが不思議そつに、受話器を持ったまま固まつている僕の顔を覗き込んだ。

今の伝言を彼女に伝えるべきか、僕は真剣に悩んでいた。

## 第一十六話

田羅口。

僕は落ち着かない気持ちで、紳一郎さんの帰りを待っていた。  
一昨日の芦川さんへの伝言を思い出して、ドキドキする。  
(結局、芦川さんには恥ずかしくてどうしても言えなかつた)

僕を、か、可愛がるって……。

いろいろと変な想像をしてしまつ僕ついやらしいのかな?

結婚してから一ヶ月近く経つけど、僕と紳一郎さんはまだキスまで  
しかしていない。

同じベッドで、ただ寝ているだけだ。

紳一郎さんの仕事が忙しくて夜遅いので、そんな時間がなかつたん  
だよね……。

結婚したばかりの時は花嫁の務めだと思つていたから、  
一度は覚悟を決めた僕だけ……。

こんなに時間が開くと、怖氣つけちやう。

余計な事を考へてしまふんだ。

僕、うまく出来るのかな?

キスされただけでガチガチになっちゃうのに……。

経験豊富な紳一郎さんが、初心者の僕なんかに満足するんだろうか?  
失望させて、嫌われたりして……。

ああ、もつと、勉強しとくんだった!!

「望様?」  
気分でも悪いんですか?

すみません。

ノックしたんですけど、お返事がないので……」

芦川さんの声がして、机に伏せっていた僕は慌てて椅子から立ち上がりた。

自分の部屋にいても落ち着かないで、勉強部屋で待機していたんだ。

「あ、芦川さん、紳一郎さん、もう帰ってきたんですか？  
すぐに玄関に行かなくっちゃ……」

「いえ、まだですけど」

「あ、そり……」

「それが、お客様がおみえなんです。

前にいらしたことがあるアンリ様と、あと、紳一郎様の従弟の方が

……  
「……従弟って、番円さん？」

そういえば、フランスに帰る前に挨拶に寄るつて言つてたな。  
本当に来ちゃったんだ。

「……存知なんですか？」

あの、紳一郎様のお留守にお通ししてもよろしいんでしょうか？  
アンリ様は今日お約束をなせつたらしこんですけど、この間のこ  
とがあります……。

望様に伺つてからと思いまして、お待たせしてるんです

「……追い返すわけにはいかないよ。

紳一郎さんも、もつすぐ帰つてくるだらうつ、お通じして下さい。  
僕もすぐに行きますから

「はい、わかりました！」

望様、この芦川がしつかりお守り致しますので、『安心なさつてく

ださい！

今日は望様には指一本触れさせませんわ」

芦川さんは厳しい顔で、指をポキポキと鳴らした。

「あ、ありがとうございます。お願ひします」

アンリさんはこの間の一件で、芦川さんのブラックリストに入つてしまつたらしく。

僕ひとりでアンリさんと香月さんのお相手をするのはちょっと荷が重いけど

これも紳一郎さんの花嫁である僕の務めなんだよね。

それに、ここでひとりで紳一郎さんの帰りを待つよりもいいかもしない。

余計なことばかり考えちゃう……。

僕は勉強部屋を出て、お密やんの待つ応接室に向かった

## 第一一十七話

「ノゾミ……なんか凄いね」

目の前のアンリさんが田を丸くしている。

「壯觀だな……」

その隣の香月さんが、優雅な仕種でカップを持ち上げながら呟いた。

僕の座っているソファーの後ろには、芦川さんを始め、何人ものメイドさんがズラリと控えている。

「姫君をお守りする騎士団つてところかな？」

アンリ、どうせ君が何かやらかしたんだろ？」

「ノゾミにフランス式の挨拶をしようとしただけだよ。

ノゾミ、どうにかならない？」

あんなに怖い顔で睨まれてけや、話もできないよ」

「芦川さん。ちょっと大げさじゃないですか？」

僕はすぐ後ろに控えている芦川さんにヒソヒソ声で言つた。

「そうですか？ 望様を完璧にお守りする為には、このくらいの人数は必要かと思いまして。

今日は相手がふたりですしつ……。

私の勘では、あの従弟の方も危険人物のような気がしますわ」

芦川さん、鋭いよ。

「……大丈夫ですよ。

「なんなんじゃ、僕も落ち着かないし……」

それに、女のひと達に守られるなんて、ちょっと情けないような気もする。

僕は芦川さん以外の他のメイドさん達には引き取つてもらつた。自分を睨み続けていたメイドさん達がいなくなつたせいか、アンリさんはホッとした顔をした。

「……に着いたらパリにいる筈のリュウが来てるんで、目を疑つたよ。

リュウ、彼に何かしたら、この僕が許さないよ？」

アンリさんが睨むと、香月さんは声をたてて笑つた。

「怖いなあ。望君にはボディガードが何人もいるんだな。小沢先輩に、アンリに、メイド軍団か……。

近寄るだけでも大変そうだ。

かなり手強いなあ。まあ、その方が燃えるけどね？」

「まったく……。早くその病氣治したほうがいいよ？」

アンリさんはもう一度香月さんを睨むと、僕の方に向き直つた。

「ノゾミ、指輪を持ってきたんだ。

シンイチロウに電話したら、今日が都合がいいと聞いてね」

結婚指輪、出来たんだ。

紳一郎さんが選んだお揃いの指輪を持つなんて、ちょっとドキドキする。

「……嬉しそうだね」

「え？」

顔を上げると、香月さんが僕のことをじつと見つめていた。

「本当に紳一郎のこと好きなんだ」

「バカだなあ、リュウ。当たり前だろ？」

ふたりは新婚ホヤホヤのアツアツ夫婦なんだから。

この前なんて、あてられちゃつてしまつたよ。

君が割り込む隙なんて絶対ないからね？」「

アンリさんがニヤニヤしながら香田さんに言った。

そうだった。

この前、紳一郎さんにキスされたところをアンリさんに見られたんだつた！

僕はあの時のことを思い出して、カーッと熱くなつた。

「ノゾミ、顔が真っ赤だよ～どつしたの？」

「な、何でもありません……」

ふたりの視線を感じて、モジモジしていると

ノックの音がして、メイドさんが慌てた様子で入ってきた。

「望様、紳一郎様がお帰りになりました！」

今、お車が入つたところですわ。

お急ぎください！」

「は、はい！」

玄関でちゃんと出迎えたいから、紳一郎さんの車が門に着いたらすぐ教えて欲しいって頼んでおいたんだ。

「アンリさん、香月さん、ちょっと失礼します！」

僕はふたりに挨拶をして、胸を高鳴らせながら玄関に走つた。

## 第一十八話

玄関の扉を開けてもらひて外に出ると、丁度車寄せにピカピカの黒い高級車が滑り込んできたところだった。

よかつた、間に合つた。

ここはお屋敷の門から玄関までの距離があるから、一いつ時助かるよ。

助手席から秘書のひとが降りてきて、後ろのドアを開けた。

「あれ？」

紳一郎さんが出でてくるのかと思つたら、若い女人の人だった。

誰だろ？

涼しげなブルーのワンピースを着たほつそりしたひとだ。

反対側のドアから紳一郎さんが降りてきた。  
そのまま女のひとのところに行つて、手に持つていたカーティガンを彼女の肩にかけた。

「芦川さん、あのお客さん、どなたですか？知つてゐるひと？」  
僕は隣に立つている芦川さんに尋ねてみた。

「お見かけしたことがあるようないような……」

えーと、どなただったかしら？ああつ！…ここまで出でるの…」

「……綺麗なひとだね」

紳一郎さんと並ぶと、すくなくお似合いで見える。

じつと見てみると、女のひとが僕に気づいて、紳一郎さんに何か言った。

紳一郎さんが振り返つてこちらを見たので、つむげっことお辞儀をした。

ふたりが僕の方に近づいてくる。

紳一郎さんは僕の前まで来ると、柔らかく微笑んだ。

「わざわざ迎えに出てくれたのか？嬉しいな。

ただいま、望」

「お、お帰りなさ

「きやつ！」

紳一郎さんの隣に立とうとした女のひとの体が前に倒れそうになつた。

「おい！大丈夫か？気分が悪くなつたのか？」

慌てて彼女を支えた紳一郎さんが、焦つた声で言つた。

「ごめんなさい。ちょっと躊躇いつて……」

「まったく、ヒヤヒヤさせるなあ。君ひとりの体じゃないんだぞ」「はい。気をつけます」

「君もわかっていると思うが、その子は朝吹の家を継ぐことになるんだ。体を大事にして、丈夫で元気な子を産んでくれよ」

え？

女のひとは困ったような顔で、お腹に手を当てている。

僕はその意味がわかつて、頭の中が真っ白になつた。

「望君」

誰かが僕の肩に手を置いた。

「あ……」

それは険しい表情をした香川さんで、

その横にはアンリさんもいて、心配そうな顔で僕を見ていた。

「少しやすんだまうがいい。すぐに君の部屋を用意させてるよ  
紳一郎さんは女のひとから手を離すと、僕の方に向き直つた。

「望、紹介するよ。彼女は。

……おい、なんでおまえがここにいるんだ？」

それに、なんだその手は

香円さんに気づいた紳一郎さんが、冷たい声で言った。

「紳一郎、おまえってやつは……。

結婚したばかりで、いくらなんでも早すぎるだらう。

望君を馬鹿にしてこるのか！」

「何のことだ？いいからその手を止める！」

望、じつに来なさい！」

紳一郎さんの声は、今までに聞いた事もないような強烈な口調だった。

僕の足は動かなかつた。

さつきまで、女のひとにはあんなに優しい笑顔を向けていたのに……。

……。

なんで、そんなに怖い顔をするの？

僕……

香円さんから跡継ぎのことは聞いてたから、

いつかこんな日が来るんだろうな、とは思つたけど……。

その時は覚悟しなくちゃつて思つたけど。

まだ、心の準備ができてないよ。

香円さんじやないけど、いくらなんでも早すぎるよ。

愛人はつくらないつて言つたのはついこの間なのに、愛人ビジネスか  
赤ちゃんまでもつくつくるじゃないか！

「望ー」

苛立つた声で名前を呼ばれて、僕は俯いていた顔を上げた。

「の、望？」

紳一郎さんの焦ったような声が聞こえた。

返事をしなくちゃいけないのに、喉が詰つて声が出ない。

それに、なぜか目が潤んできて紳一郎さんの顔がぼやけて見える。

「シンイチロウ、見損なつたよ」

「紳一郎様、あ、あんまりです！ 望様がお氣の毒ですわ！」

「こんな純粋な子に、なんて酷い仕打ちをするんだ。

こんなヤツが従兄だなんて、恥ずかしいよ！」

香円さん達が口々に紳一郎さんのことを責め立てている。

「おまえたち、何を言つてるんだ？」

どうして、望は泣いてるんだ！！

誰か説明してくれよ……

困ったような紳一郎さんの声が聴こえるけど、どんな顔をしているのかわからない。

どうしよう、涙が止まらないよ。

## 第一十九話

「どうしたの？ 可愛い顔が台無しよ？」

優しい声と一緒に、頬に柔らかい物が押し当てられる。女のひとが、ハンカチで僕の涙を拭ってくれていた。

「かまわないでください……」

小さな声で断つて、それを避けるように後ずさった。このひとに気遣われるなんて嫌だ。

田を「シゴシ」と擦つていると、誰かがブツと吹き出すのが聴こえた。

秘書のひとが口に拳を当てて肩を震わせている。

「……加納、何がおかしいんだ」

紳一郎さんの尖った声に秘書のひとは咳払いをした。

「失礼。我慢していたんですけど。

皆さん、なんと言つかるか……」

秘書さんは僕達ひとりひとりの顔を順番に見て、またブーツと吹き出した。

このひとが笑うところなんて初めて見たような気がする。いつもクールで無表情なんだよね。

でも、なんでこんな空氣の中で笑えるんだよー。

「望

紳一郎さんが僕の名前を呼んだ。

秘書さんのおかげ（？）で涙は止まっていたので紳一郎さんの困惑しているような顔が目に入った。

つらいけど、今、言わなくっちゃ。

「……紳一郎さん、お話があります」

「え？」

「僕、実家に帰らせてもらいます。り、離婚してくださいー。」

紳一郎さんは、僕の言葉に眉を顰めた。  
そして、冷たい瞳で僕を見据えた。

この瞳には見覚えがある。

初めて会った日に、僕を脅したときとおんなじだ。

お父さん、僕のせいでは社がつぶれたらごめんなさい！！  
でも、僕、紳一郎さんことを好きになっちゃったんだ。  
好きだから、他に女のひとがいる紳一郎さんと結婚しているのは凄  
くつらいんだ。

……僕って独占欲の強いヤツだったんだね。  
自分でも気づかなかつたよ。

「だめだ」

紳一郎さんは低い声で言った。

「契約は一年の筈だ。まだ一ヶ月しか経っていない。  
君は平気で約束を破るような人間だったのか？  
失望させないでくれよ」

今の言葉に力チンとくる。

……紳一郎さんがそれを言つ？

僕は紳一郎さんをキッと睨みつけた。

「それはこっちのセリフだよ！」

僕だけだって言つたくせに…嘘つやー。」

「まあ、もう夫婦喧嘩?

こんなにギャラリーがいるところではやめといた方がいいわねえ。  
ところで、契約ってなんのこと?」

いきなり割り込んできた声に、僕達はギクリとした。  
そして、ふたりでおそるおそる声のした方を見た。

そこには、

着物姿の小野なおばあさんが二三二三して立っていた。

「おばあちゃん...」

番円さんが慌てた様子でねばあさんと顔を寄つて行った。

「一体今までどおりでしたんですかーー？」

別荘で静養されると聞いていたのに、どうやらしゃらなーい、  
捜したんですよーー？」

「知り合いで温泉旅館でのんびりしていたのよ。

別荘なんかにいたら見舞客の相手が面倒ですかーりね  
おばあちゃんはおつとつと言つた。

このひどが、朝吹のおばあさん？

想像していたひとと違うなあ。

小さくてかわいいおばあちゃんだ。

朝吹家で一番偉いみたいだから、もつと怖そつな感じのひどだと思  
つてた。

「紳一郎？」

「……はい」

紳一郎さんが氣まずい顔で返事をする。

「話は中で聞かせてもらいますよー？」

「……

「ゴーゴーするけど、有無を言わせない感じ。  
せつぱり、怖いひとなのかな？」

「呆れてものが言えないよ」

香月さんが低い声で言った。

紳一郎さんはふてくされたようにして、行儀悪くソファーにもたれかかっている。

僕達は応接室に場所を移した。

僕の隣には紳一郎さん、その隣には女のひとが座っている。

……嫌な構図だなあ。

紳一郎さんを挟んで本妻（僕）と愛人が並んでるなんて。

正面のソファーにはおばあさんが座っていて、両隣には香月さんとアンリさんがいる。

おばあさんの後ろには、サングラスを掛けた若い男のひとが控えていた。

車寄せにおばあさんが乗ってきたらしい車が止まっていたから、このひとが運転してきたんだろうな。

ドアの近くには秘書のひとが立っていて、いつもの無表情に戻っている。

芦川さんやメイドさんはお茶の用意が済むと部屋から出て行った。しまった。

なんだか心細いな……。

皆がソファーに落ち着くと、紳一郎さんは結婚までの経緯を何もかもバカ正直に話してしまった。

まるでヤケになつてゐるみたいだ。

あれから一度も僕の顔を見ようとしないし……。

「父親の会社の件で脅して無理矢理自分の花嫁にしたってことか。つまり、望君の人生を、朝吹の権力で買つたんだな？」

……援助交際より性質が悪いじゃないか

香円さんの言葉に、紳一郎さんの眉がピクリと動いた。

「リ、リュウ、その単語はNGだよ？」

アンリさんが慌てて窘めると、香円さんはハツとした顔で僕を見た。

「いや、今のは望君を侮辱したわけじゃないんだ。  
すまない、失言だった」

「いいえ……」

「いいえ……」

そうだよね。

僕がやつてることは、援助交際と変わらないんだ。

お父さんの会社と僕の体を引き替えたんだから……。

「望は被害者だ。全部俺が悪いんだよ。何とでも言つてくれ。

望とは離婚して実家に返す。……どうやら嫌われているみたいだからな。

もちろん、彼の父親には何もしない。

これでいいだろ？

「え？」

僕は思わず紳一郎の方を見た。

さつきは離婚は許さないって言つてたのに……。

紳一郎さんはかたくなに僕の方を見ようとしなかつた。

香円さんはそんな僕達を見て溜息をついた。

「嫌われるのは当たり前だろ？」

卑怯な手段で望君を自分のものにしたうえに

平気な顔で身重の愛人をここに連れてくる無神経なヤツなんですか

「何？」

「あのう、皆さん何か誤解なさつてるようなんですけど……  
女のひとがオズオズと声をはさんできた。

「お腹の子の父親は、あの……」

彼女はおばあさんの方をチラチラと伺いながら、言ことへてひきこで

ている。

そんな彼女に代わって紳一郎さんが言った。

「親父の子だよ。彼女は親父の恋人だ」

「ええっ！？」

僕と香月さんとアンリさんの叫び声が重なった。

「……まさかおまえ達、彼女が俺の愛人だと思つたんじゃないだろうな！？」

紳一郎さんは怒りを抑えたような声で言つてから、初めて僕に視線を向けた。

こっちを見てくれたのはいいけど、凄く怖い顔をしている。皿を合わせられなくて、僕は俯いてしまった。

そういえば、紳一郎さんのお父さんってマジンションで女のひとと一緒に暮らじてるって言つてたっけ。

こんなに若いひとだとほ思わなかつた。

なんだ……。

僕の勘違いだつたんだ。

よかつた。

……でも、

紳一郎さん、さつき僕と離婚するつて言つたよね？  
僕も離婚してくださいって言つちやつたし……。  
これつて離婚成立？

## 第三十一話

「俺と入れ替わりに、今度は親父が向こうに行くなつてね。留守の間彼女をひとりにするのは心配だから、ここで預かってくれと頼まれたんだ」

紳一郎さんが尖った声で説明した。

「俺は『平氣で身重の愛人を花嫁に紹介する無神経な男』だと思われたのか。

……君は俺のことを信じていなかつたんだな」

「ごめんなさい」

小さな声で謝つたけれど、紳一郎さんは何も言つてくれなかつた。  
……怒つてるんだ。

「ふん。誤解される方にも問題があるんだ。

何しろおまえは、複数の恋人と同時につきあえる器用な男だからな。それに、今更そんなことどうでもいいじゃないか。

どうせ離婚するんだろう？」

「龍一、おやめなさい」

今まで黙つて話を聞いていたおばあさんが、香円さんを窘めた。

「あなただって、けして褒められた性格じゃありませんよ？」

子供の頃から紳一郎が持つている物ばかり欲しがつて、手に入れた途端すぐに飽きてポイ。

今でもそのクセは治つていないそうね？」

香円さんは子供みたいに唇をへの字にした。

「……おばあさま、僕のことはいいでしょう。

大体、望君がこんな目にあつたのは、もとほと言えばおばあさまが悪いんですよ？」

妙な方法で紳一郎の花嫁を選んだりするからじゃないですか

「だつて、どうじても望ちゃんを紳一郎のお嫁さん」に欲しかったの  
よ

え？

思わず顔を上げると、穏やかな笑みを浮かべてくるおばあさんと田  
が合つた。

僕はその笑顔に何か引っかかるものを感じた。

それに、今のはどうこうの意味？

「そうそう、望ちゃんにお土産があるのよ。すっかり忘れていたわ。  
速水、あれを」

後ろに控えていた男のひとが返事をして、紙袋をおばあさんに渡し  
た。

いつのまにかサングラスをはずしていて、ハンサムな顔が現れてい  
る。

……気のせいかなあ？

このひと、前に会つたことがあるような気がするんだけど。

「はー、まだあたたかいわよ」

おばあさんが紙袋から取り出した包みを僕に渡してくれた。

こんな雰囲気の中でいいんだろ？

……なんだか暢気なひとだなあ。

「あ、ありがと」「わざこめや……あれ？」

この包装紙にはすゞく見覚えがある。

桃のイラストと店名がプリントされていくこれは、

僕がいつも桃まんじゅうを買っている『モモタロ』の包装紙だ。

「お店は来週から開けるつもりなんだけど、望ちゃんの為に特別に作ったのよ」

「え？」

僕は今の言葉の意味を考えながら、包みとおばあさんの顔を何度も見比べた。

そして、

10秒ほどおばあさんの顔を見詰めた後、おしゃるおしゃる尋ねてみる。

「……もしかして、おばあちゃん？」

「気がつくのに随分時間がかかったわねえ、望ちゃん」

『モモタロ』のおばあちゃんが、呆れた顔で僕に言った。

「だつて……」

『モモタロ』のおばあちゃんは、お店ではいつもある「メガネを掛けたて、

三角巾と翻意着姿で、そんな高そうな着物なんか着てないし……。

それに、

「……いつもはそんな喋り方じゃないよね？」

お店ではもつとチャキチャキして、今みたいにおつとりした話し方はしない。

「あの格好をすると自然にあんなちやうのよ。

商売人モードになるのかしらねえ」

おばあちゃんは口に手をあてて上品に笑った。

「…………」

お店ではいつも大口開けて笑ってるよね？

朝吹のおばあさんと『モモタロ』のおばあちゃんが同一人物？  
どうじうこと？

頭の中がグルグルしてきた。

「……おばあちゃん、どこか悪かったの？

お店、ずっと閉まってるから心配してたんだよ？

病気で入院でもしてるんじゃないかなって……」

聞きたいことはたくさんあつたけど、

とりあえずすっと氣になっていたことを聞いてみた。

「え？ええ、ちょっとね」

おばあちゃんは僕の質問に目を泳がせた。

「店で業務用の砂糖袋をひとりで持ち上げようとして、ギックリ腰

になられたんですよ」

後ろの男のひどがおばあちゃんの代わりに答えた。

「は、速水！」

「紳一郎様と望様の結婚が決まってそれはもう大喜びで、はつきりすぎたんですね。

お年も考えずに無理なさつて……。おかげでおふたりの結婚パーティも出席できなくなつたんですよ？情けない姿で皆の前に出るのは嫌だと仰つて」

「速水！バラすんじゃありません！」

「……申し訳ありません」

男のひとは笑いをこらえながらお辞儀をした。

……思い出した。

「このひと、あのパーティで桃まんじゅうを勧めてくれたボーイさんだ。

あの時のことを思い出しながらじつと見ていろと、それに気づいたのか彼が一コツと微笑んだ。

「何をふたりで見つめあつてるんだ？」

隣から不機嫌そうな声が聞こえた。

「べ、別に……」

チラリと紳一郎さんを見たら、相変わらず仏頂面をしている。

「おばあちゃんはもつたいつけるようこみつけと紅茶を飲んだ。

僕達にもわかるように説明してください。

以前から望君のことは存知だったってことなんですか？」

「おばあちゃんはもつたいつけるようこみつけと紅茶を飲んだ。

「実は私、去年の秋からお店を始めたのよ。

桃まんじゅうのお店で『モモタロ』って言つたの」

「モモタロ?」

「せう、私の名前の『百代』とむじこさんの『一太郎』からとったのよ?」

「いこ名前でしょ?」

「……」

「去年からなかなか所在が掴めないはずですよ。  
てつ生きりこつものように海外で別荘巡りでもされてるのかと思つて  
いたのに」

香月さんが呆れたように言つた。

「紳一郎、おまえ知らなかつたのか?」

「……ああ。今、初めて聞いた」

「旅行も飽きたし、かといつて家に留てもする」とはないし、  
息子も孫も忙しくて、ほとんど顔も見せてくれないしねえ……」  
おばあちゃんが淋しそうに言つと、紳一郎さんと香月さんは気まず  
そうな表情になつた。

「ここのままお迎えを待つだけの味氣ない生活は嫌だなあと思つたの  
よ。

私のような年でも立派に働いてるひとはたくさんいるんだし、  
大好きな桃まんじゅうのお店を始めることにしたの。  
生活がかかつてゐわけじゃないから、道楽だと言われても仕方ない  
けどね?」

おばあちゃんは悪戯っぽい声で言つた。

「確かに他の店に比べたら営業時間は短いし、定休日も多いお店  
だ。

「望みちゃんが初めてお店に来てくれた日のことはよく覚えてますよ。

恥ずかしかつてモジモジしながら入ってきたわね？可愛かったわ

「…………

おこしに桃まんじゅうのお店が出来たって噂を聞いて、初めて『モモタロ』に行つた時は、

お店の中に近くの高校の女子生徒がたくさんいて圧倒されたんだ。僕、ずっと男子校だから免疫がなかつたんだよ…………。

あの時は勇氣を振り絞つてお店に入つたんだ。

「私のおまんじゅうを気に入ってくれて、お店に何度も来てくれるようになつたでしょ？」「話をしたら、素直で、やつやくみたいに私の体を気遣つてくれるいい子だし……。

店にはいろんな女の子が来るナビ、壁ちやんぽび可愛こ子はこませんでしたよ。

どうしても朝吹の家に迎えたくなつてしまつたの。都合のいいことに孫の紳一郎はまだ独身で、決まつたひとはないようだつたし、

この際ふたりを一緒にいたよと思つたのよ

……おばあちゃん、僕の性別のことなど考えなかつたの？

「おばあちやん、僕のじと女の子だと思つてゐる感じなんですね？」  
念のために確認をしてみる。

「まあ、望むひやんつたら」

おばあちやんはぐすくすと笑つた。

「まだそんなにボケむひやこませんよ。

でも、スカートをはいてたらわからなかつたかもね」

「…………おばあちやん」

「冗談よ。

問題ないと思つたのよ。紳一郎は女性とも男性ともおつきあこの出来る……

えーと、何で言つたかしら？……バイ？なんじょ？

おばあちやんの無邪氣な声に紳一郎さんは悲い顔をした。

「よくそんな言葉を！」存知ですね

「お店には若こ子もたくさん来るから、いろいろ勉強していりんで

すよ」

「…………そんな単語、こつ使ひますか」

「おばあれま、朝吹の後継者のじとせどりあぬおつもつだつたんですか？」

望君を傷つけないですむいい方法をもひるん考へてたんですね？  
まさか、忘れてたとか言わないで下さこよー？」

香円さんに強い口調で問われて、おばあちやんは皿を丸くした。

「洋一郎に頑張つてもひりつもりでしたよ。

あの年でこんなに若こお嬢れふとおつかいをされた元気なんですもの。

「これから何人も紳一郎の兄弟を増やしてくれるはずですよ~。」

「え……」

女のひとがビックリした顔でおばあちゃんを見ている。

「……あの、私達のこと許してくださるんですか？」

「許すもなにも別に反対なんかしてませんよ~洋一郎がそう言つたの？」

「いえ、洋ちゃ…洋一郎さんは何も……。

お母様に紹介してくださらないの、てつひとつ私達のことをお気に召さないのかと思つてました」

「ああ、じめんなさいねえ。

洋一郎からあなたと一緒にになりたいと聞いたのは、一度『モモタロ』の開店準備で超忙しい時で、バタバタしていたのよ。

『勝手にしていいわよ』と言つたら、あの子さつさとの家を出でいつちやつたのよねえ。まったく、せつかちなんだから

「……そんな言い方では親父も誤解しますよ」

紳一郎さんが窘めると、おばあちゃんは苦笑いをした。

「店のことがあの子にばれたら絶対に邪魔されると思つて、じばらく顔を会わせたくなかったのよ。

落ち着いてから紹介してもらおうとは思つてたんだけど、お互に忙しくてなかなか時間がつくれなくてねえ。

晶子さんだつたわね。確か紳一郎の大学のお友達だそうね

「…はい

「去年の春にもここでパーティーをやつたこと覚えてらっしゃいますか？」

彼女も来てくれたんですよ。その時親父が一田惚れしたんですね。

……どういう訳か彼女もね。

それを聞かされた時は、俺も驚きましたけどね

紳一郎さんがふたりの出会いを説明した。

紳一郎さんのお父さんは結婚パーティーでしか会つた事はない。

朝吹グループの社長さんだけあって、貴禄はあるけど、優しい感じのひとだったな。

「まあ…やっぱりパーティってロマンス発生率が高いのねえ。晶子さん、あなたもお腹の赤ちゃんも歓迎しますよ。

体を大事にして、いい子を産んでちょうだいね？」

「はい！ありがとうございます」

おばあちゃんの優しい言葉に、女のひと……晶子さんは、嬉しそうに微笑んだ。

「えーと、どうまで話したかしらねえ。

そうそう、

それで、紳一郎と望ちゃんをつまづくつける方法をいろいろ考えたんですよ。

せっかくだから、できるだけロマンチックなほうがいいと思つてね。運命の指輪に導かれて出会つたふたりが結ばれるなんて素敵でしょ？ 実は、以前読んだロマンス小説を参考にしたのよ！」

おばあちゃんは手をキラキラさせて言った。

「運命の指輪ねえ、都合よく望君がそれを見つける訳ないですよね？」

もちろん、おばあさまが小細工なさつたんでしょう？

香月さんが尋ねると、おばあちゃんは肩を竦めた。

「パーティの日、ここにいる速水にボーイに変装してもうつて望ちゃんに指輪入り桃まんじゅうを

勧めもうつたのよ。桃まんじゅうには田の無い望ちゃんだから、絶対うまくいくと思ったんだですよ」

う……。

簡単に引っかかった僕って……。

「運命の指輪、花嫁選びのパーティ、ハンサムな御曹司、可愛い男子高校生、これだけロマンチックな条件が揃つたらロマンスが生まれないのは嘘だと思ったんだけどねえ。何がいけなかつたのかしら？」

おばあちゃんは首を傾げている。

「その、『男子高校生』ってところじゃないかと思うんだが……。もし僕が女の子だったら、一瞬で紳一郎さんに恋をしたんだろうな。格好よくてお金持ちで、女の子の理想の塊みたいな紳一郎さんに会つたその日にプロポーズされるなんて、まるで御伽話みたいだもんね。」

「あなたならうまくやると思つたのに、情けないわねえ。紳一郎？ 口説くのではなくて、脅迫するなんて……。」

世間ではプレイボーイとか言われてるらしいけど、もっとましな方法は考え付かなかつたの？」

おばあちゃんに睨まれた紳一郎さんは、気まずそうな顔をした。

「……あの時はそれしか思いつかなかつたんですよ。プロポーズをあっさり断られて、頭に血が昇つたんですよ。自分でもどうかしてると想つましたよ」

「普通の男子高校生が男からのプロポーズを喜んで受けれるわけがないだろ?」

香月さんが呆れたように言った。

「花嫁候補の中に男の子が混じってるなんて、何かの手違いだろ?」  
と思つたさ。

最初は彼の反応が面白くて、[冗談半分だつたんだ。  
なのに、気がついたら彼を脅す言葉を口にしていた。  
自分でもバカなことをしたと思つてるよ]

紳一郎さんは額に手を当てひとつ溜息をつくと、僕の方を見た。

「望君。

申し訳ないことをした。

謝つて済む事じゃないかもしけないが、後悔しているよ。  
あんな卑怯な手段で、君を手に入れようとするなんて、最低の男だ  
な、俺は」

紳一郎さん、顔色が悪い。

海外出張で疲れて帰つて来たばかりなのに、  
僕達に赤ちゃんのこと誤解されて、  
それから、結婚のことで責められて、  
ついでおばあちゃんにも怒られちやつて。  
なんだか……。

「紳一郎さん、あの」

「そんな目で見ないでくれ」

紳一郎さんは僕の言葉を遮るよつてして顔をそむけた。

「え?あの、僕」

紳一郎さんはいきなりソファから立ち上がった。

「悪いが、少し休ませてもらひつよ。

昨日から寝てなくてね。冷静に話せそうにないんだ。

おばあさん、申し訳ありませんが、失礼をせてもらこます。

晶子君、部屋は用意するよつて言つておくから

紳一郎さんは一気にそれだけ言つて一礼すると

秘書のひとと一緒に部屋から出て行つてしまつた。

ど、どうしよう。

追いかけで、離婚したくなつて言わなくつちや。  
脅されたことも、もう氣にしてなつて。

「リュウ、誰が器用な男だつて？」

アンリさんが可笑しそうに言つた。

香円さんも口に拳をあてて笑いをこらえている。

「撤回するよ。

ね、望君。さつき、君泣いてたよね。

あんまり泣き顔が可愛らしくから、抱きしめたくなつて困つたよ  
「はあ？」

「はあ？」

また変なこと言つ出したよ、このひとつは……。

今、そんな場合じやないのにー！

「どうして泣いちゃつたの？」

「え……」

「私のこと紳一郎さんの愛人だと思つたんでしょつへ。  
晶子さんが優しい声で言つた。

「紳一郎さんに愛人がいたことが許せなかつたのよね。  
それで、離婚したいなんて言つたんでしょつへ。  
僕は戸惑いながらも頷いた。

「でも、もう誤解は解けたから、問題はないわよね？」

晶子さんはそう言ってにっこり笑った。

おばあちゃんや他のひと達には、僕の気持ちは何故かバレバレらしい。

「……」

「……はい。

僕、紳一郎さんと話してきます

紳一郎さんを疑つたこと、もう許してくれないかもしね。

とても怖い顔してたもんね。

やっぱり離婚することになるのかもしれないけど……。

でも、

紳一郎さんに僕の気持ちを何も告げないままこの家を出て行くなんて絶対後悔することになるよな。

勇気を出さなくっちゃや！

僕はソファから立ち上がりドアに向かおうとした。

「ノゾミー・忘れ物だよ」

「え？」

アンリさんの声に振り返ると、何かが僕に向かつて飛んできた。慌ててそれをキャッチする。

これって……。

「せっかく用意したんだから無駄にしないで欲しいな

アンリさんはさりげなく僕にウインクをした。

居間には紳一郎さんの姿はなかつたけど、テーブルの上に蓋が開いたままのブランパーの瓶とグラスが載つていて、ソファーにはスーツの上着が脱ぎ捨てられていた。

寝室かな？

「紳一郎さん？」

おそるおそる寝室のドアを開けると、床の上にワイヤーシャツやネクタイが散らばっていた。

バスルームを使つてゐる氣配がする。

僕はそれを拾い上げ、軽く置んでもベッドの上に置いた。

「…………」

な、なんだかドキドキしてきた。

ベッドに腰掛けて胸を押える。

よく考えたら、僕つて告白するのも初めてなんだ。

なんて言おう。

まず、晶子さんとのことを疑つたこと、もう一度謝つたほうがいいよね。

えーと、それから、離婚はしたくないって言わなくつけや。

ううん、それより前に紳一郎さんを好きだつてことを言つたほうがいいのかな？

ドアの開く音がして、僕は慌てて立ち上がりベッドから離れた。バスローブを着た紳一郎さんが、髪を拭きながら出でてくる。

「紳一郎さん」

僕が声をかけると、紳一郎さんは俯いていた顔を上げて僕の方を見た。

「……望」

「あ、あの、ごめんなさい！」

僕にいきなり謝られて、怪訝そうな顔になる。

「……何のことだ？ 君が謝ることは何も無いだらう」

「晶子さんのこと……」

「……ああ、そのことか。別にいいよ。君が俺のことを信じられなかつたのも無理はないさ」

紳一郎さんは自嘲気味に言つて、ベッドに腰掛けた。

乱暴な手つきでまた髪を拭き始める。

「あの……」

紳一郎さんの顔を見たらますます緊張して、何から話したらいいのかわからなくなってきた。

「これ……？」

紳一郎さんが小さい箱を手にした。

応接室でアンリさんが僕に投げて寄こしたものだ。  
さつきシャツを置んだ時に、邪魔だつたからベッドの上に置いたんだつた。

「け、結婚指輪です」

「……」

紳一郎さんは複雑な顔をした。

「無駄になつてしまつたな。……俺のまつで処分しつくよ

「え！？」

处分？

捨てちゃうの？

「だ、駄目です！」

僕が大声で叫んだので、紳一郎さんは驚いた顔をした。

「紳一郎さんが嫌じゃなかつたら、その指輪、僕にください……」「え？」

「だから、僕、あの……えーと」

言いたいことはたくさんあるのだが、うまく言葉にならない。

……告白って難しい。

こんなことなら、もひとつ練習しどくんだったよ……。

紳一郎さんは変な顔をしてくる。

「…………」

僕はベッドに腰掛けている紳一郎さんのところに行つて真正面に立つた。

そして、

彼の唇にそつと自分の唇を押し付けた。

紳一郎さんは、田を大きく見開いたまま固まっている。

今日は紳一郎さんのいろんな顔を見るなあ。いつもきちんとした大人の男のひとなのに、今は髪がクシャクシャで、子供っぽく見える。なんだか胸の中がくすぐったくなってしまった。

何て言つたらいいのかわからなくて、行動で僕の気持ちを伝えようと思つたんだけど。

いきなりキスなんかして変だつたかな？

急に恥ずかしくなつて、下を向いてモジモジしていると紳一郎さんが僕の腕を掴んだ。

顔を上げると戸惑つたような顔で僕を見詰めている。

「……君は、俺のことを嫌つてゐるんじゃないのか？」

紳一郎さんは、躊躇うような口調で言つた。

「え？」

どうしてそんなこと言つんだらう？

嫌いな人に自分からキスするわけないじゃないか！

「最初に君を脅すような真似をしたからな。好かれている自信はなかつたよ。

俺に触れられても抵抗しないのは、契約の為に我慢しているんだろうと思つていた。

それに、最近おかしかつただろう？

抱きしめても体が強張つていたし、俺を避けているようだつた。

さつき離婚したいと言わた時、とうとう俺との結婚生活に堪えら

れなくなつたのかと思つたんだ  
「ち、違ひます！」

紳一郎さんを好きだつて」と云つて、意識しまへじだつたんだ  
よー。

「僕、変なんです。

紳一郎さんにキスされたらドキドキして、フワフワして、カチンカ  
チンになつちやつし、傍にこられたら緊張して顔がまともに見れないし、  
自分がどうしてこんなに見えてるのかわからな  
つちやうし、  
こ、これって好きだから？「..  
だんだん声が小さくなつてしまつ。  
自分で向を言つてゐるのかわからな  
いよ。

「わっ！」

掴まれていた腕を強く引っ張られて、僕は紳一郎さんの膝の上に乗  
つかつてしまつた。

……凄く恥ずかしい格好だ。

至近距離にある紳一郎さんの顔が、微笑んでいる。

「あの日、応接室で初めて君と話した時、からかいがいのありそ  
な男の子だと思つたよ。

俺の言つことこいつこいつ素直に反応して、困つた顔がとびきり可  
愛くて」

「.....」

つここの間、似たようなことを誰かに言われました。

「君にプロポーズを断られた時、どうしてあんなことを言ってしまったのか自分でもわからなかつた。

プライドを傷つけられたせいかとも思つたよ。

自慢じやないが、今まで振られたことなんかなかつたからな。

……でも、違つた

紳一郎さんは真っ直ぐな瞳で僕を見て言つた。

「君に、恋をしたからなんだ」

「え……？」

恋？

紳一郎さんが僕に？

紳一郎さんも僕を好きになつてくれたつてこと？  
本当に？

紳一郎さんが田を瞠つた。

「そんなふうに笑つた顔を初めて見た」

え？ そりだつけ？

……そう言えば、

この屋敷に来てから、心から笑つた記憶があんまりない。  
特に紳一郎さんの前では緊張してたから……。

「えぐぼが出来るんだな。……今まで気づかなかつたよ  
紳一郎さんはそう言つて、人差し指で僕の頬を突付いた。

「望、

俺のものになつてくれ。必ず幸せにするよ。約束する

真剣な顔で言つて、僕はコクンと頷いた。

嬉しくて、胸がいっぱい、涙が出そうになる。

紳一郎さんは嬉しそうに微笑んで、僕の体をギュッと抱きしめた。唇を重ねられて、そのままベッドの上に優しく押し倒される。

「指輪の交換は、後回しにしていいか？」

「……はい」

そして、

その日僕は、紳一郎さんの本当の花嫁になつたんだ。

朝吹邸の玄関前には、紳一郎さんを見送るために使用人の人達が整列していた。

昨日海外出張から帰つたばかりなのに、紳一郎さんは今日もお仕事なんだ。

いつものように帰りは真夜中なんだろうな……。

そつと溜息をついて、それから、じつやうと自分の左手を見た。薬指にはプラチナの指輪があさまつてある。

夢じやないんだよね？

あの後、紳一郎さんはとっても優しかったけど、途中からじょっと意地悪だつたような気がする。

だって……

つて、朝から何を想い出してるんだよ僕は！

「望ちゃん？」

「ひやー！」

いきなり後ろから肩を叩かれて、変な声を出してしまった。振り返ると、おばあちゃんと速水さんが並んで立つてある。

「お、おばあちゃん……脅かさないで」

「何度も呼んだのに、気づかないんですね」

立つたままで寝ているのかと思つたわ

「おばあさん、わざわざ見送りをして頂がなくても……。

おやすみになつていってください。ギックリ腰は大丈夫なんですか？」

紳一郎さんが気遣つようつておばあちゃんに言った。

「いの時間じやないと、あなたとお話をできませんからね。

昨日はお客様をずっとほつといたまま、夕食にも顔を出さないし。龍一と、あの綺麗な外人さん…アンリさんだったわね。あなた達のことを心配して遅くまでいてくださったのよ?

うまくまとまたのなら、報告ぐらにしてくれればいいのにねえ

「すみません」

「じめんなさい。おばあちゃん」

「……紳一郎、仕事に行く前にその緩んだ顔をビリビリかなさい。といひで、加納さんはいるかしら?」

僕達へのお説教を済ませると、おばあちゃんは秘書の加納さんの姿を探した。

「はい。なんでしょうか?」

後ろにいた加納さんがおばあちゃんの前に進み出る。

「メイドさんに聞いたんだけど、この子結婚してから一丁もお休みなしで働いてるんですって?」

紳一郎をこき使つのは構わないけど、望ちゃんに寂しい思いをさせるのは可哀想ですよ

加納さんは僕の方に顔を向けて、唇を緩ませた。

「申し訳ありません。

どうしても来月は長期休暇を取りたいと仰るので、  
休日返上の厳しいスケジュールになってしまったんですね

長期休暇?

「望とふたりで海外にでも行こうかと考えているんです。

彼も学校がありますからね。夏休みに合せようつと黙つたんですよ」

「まあ、素敵。ハネムーンね?」

よかつたわねえ、望ちゃん。どこか静かでロマンチックな場所で思いつきりイチャイチャしていらっしゃい。そつそつ、おととし買つた南フランスの古城なんかどう?

オプションで一百年前の幽霊カップルがついてるのよ。

残念ながらまだお会いしたことはないんだけど……。

それとも、結婚祝いに南の島をプレゼントしてしまったか? ヘリとクルーザーもつけて。ね?」

「ありがとうございます。行き先は望と相談して決めますよ」

「…あの」

「ん?」

「お休みの間は、ずっと紳一郎さんと一緒にられますよね?」

僕は周りのひとに聞こえないように小さな声で言つて、紳一郎さんを見上げた。

嬉しくて、思わず二三回口にしてしまつ。

紳一郎さんは目をパチクリさせた。

それから

いきなり僕の体をぎゅうっと抱きしめた。

し、紳一郎さん!

周囲にはメイドさん、おばあちゃんや、加納さんや…とにかく、まわりにひとがいっぱいいるんだよーー

紳一郎さんは、優しく微笑んで僕の唇にキスを落とすと、耳元でひと言囁いた。

それは、  
甘くて、  
ふわふわして、

あつたかくて、  
とっても幸せな気持ちになれる  
魔法の言葉だつたんだ。

e n d / SWEET TRAP

## 最終話（後書き）

最後までおつきあいいただき、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2959p/>

---

SWEET TRAP

2011年1月17日12時38分発行